

[ジョイント]

December 2011

No. 8

【特別対談】これからの日本と世界
そして、われわれの役割

本号では、奥田碩会長と遠山敦子理事長による「特別対談」の他、パネル・ディスカッションの報告、インドネシアへの活動地訪問、東日本大震災復興支援プログラムの紹介等、トヨタ財団の考えと活動を取り上げながら、よりよい未来のための私たちの役割を探る。



危

機の時代が続いている。金融面でのギリシア危機に続き、イタリアでも財政問題を機に政権交代が起きた。リーマン・ショック以来の危機をなんとか乗り越えたかに見えた世界であったが、金融面での深刻な不安定性が継続している。1929年に始まった大恐慌の時と同様に、一旦危機を乗り越えたかにみえてもさらに危機が襲う長期にわたる深刻な不況の時代に突入するのであるか。

楽観的になれない要因が多いように思う。ヨーロッパにおいて信用収縮の悪循環が始まってしまえば、その原因が各国の危機的な財政事情によるだけに、リーマン・ショック後のような単純な財政出動による回復という措置はとりにくい。日本を襲った長期デフレに世界が陥る可能性も否定できないのではないか。復興プロセスを進めようとする日本にとっても人ごとではない。

しかしながら、日本ではこの世界経済の危機についての深刻さの認識が欠如したまま大事な政策論争が行われている。典型的な事例が、TPP（環太平洋経済連携協定）をめぐる議論である。TPP参加の得失については、さまざまな議論が可能であるが、今後の世界経済を支えていく必要性といった大局的な議論が十分展開されていないように見える。

現

在の世界経済の成長の中心は、なんといってもアジアである。このアジア経済をさらに活力あるものにしていくことによって、ヨーロッパの経済危機の世界全体への影響を限定的なものにすることが必要ではないか。TPP参加は、決して万能薬ではない。しかし、TPPも含め、アジア太平洋の経済を拡大し

国家主席に就任すると言われているが、この政権移行はスムーズに進むかどうか。景気が目に見えて減速していったとき、社会不安の発生をうまくコントロールできるかどうか。不健全なナシヨナリズムが登場することを防ぐことができるのか。指導部のなかに、対外的な問題を作り出すことによって、国内の不満をそらすとする誘因に駆られる人々はでてこないだろうか。あるいは、対外問題を政争に利用しようとする勢力はでてこないだろうか。

日本はどうすべきか。まずもって、ヨーロッパの危機の悪化を食い止めるための国際協調を進めなければならない。これに加え、復興を着実に進め、内需を中心にした成長を継続させる必要がある。さらに、アジア太平洋全体の経済成長のための数々のイニシ

危機の続く時代に、日本はどうすべきか

東京大学東洋文化研究所教授
田中明彦

ていくさまざまな措置が現在求められているのである。

さらにいえば、事は経済のみにとどまらない。1930年代の教訓を学ぶとすれば、世界的な不況の政治面・安全保障面への影響を考えないわけにはいかないからである。ドイツにおけるナチ、日本における軍国主義の台頭には、さまざまな原因があるが、その一つの大きな背景には、世界大不況があった。もちろん、大不況になったからといって、現在のドイツや日本で、ファシズムや軍国主義が再来することは考えられない。問題は、20世紀前半のドイツや日本のように急速に発展をとげつつも社会的に矛盾を多く抱える国にあるのだと思われる。現在の世界で当時のドイツや日本に当たる国はどこか。やはり新興

国であり、とりわけ中国にそのような課題が一番多いのではないかとと思われる。中国のこれまでの経済面での成功は素晴らしいし、長期的には、中国が世界最大の経済大国となることも、ほとんど間違いないように思う。しかし、今後の経済の行方には、まだまだ紆余曲折がありうる。リーマン・ショック以後は、大量の財政出動で、高い経済成長を持続させた中国であるが、今回のヨーロッパ発の危機に際しては、同様の対応はとりにくい。すでに、インフラ投資などについては、急速にストップがかかっている。節度ある景気減速をめざすというのが、現在の中国政府の対応なのである。

このような中国政府の対応の成功を期待するが、課題は極めて大きい。時あたかも、中国共産党の指導体制の交替の年である。習近平氏が、胡錦濤氏の後をついで共産党総書記として

アティブをとっていくべきである。TPP参加はその一つにすぎない。これら経済的措置に加え、外交面・安全保障面での努力もわすれてはいけない。強固な日米同盟こそが危機の時代の日本の下支えである。鳩山政権の登場以来弱体化した日米同盟の修復につとめていかなければならない。また、2012年は、日中国交正常化40周年であり、中国とのパイプをさらに強化していく必要がある。

● たなか・あきひこ
1954年埼玉生まれ。政治学者、東京大学東洋文化研究所教授。主な著書に『新しい「中世」』(日本経済新聞社、サントリー学芸賞)、『ワード・ポリテイクス』(グロバリーゼーションの中の日本外交)、『筑摩書房』、『読売』、『吉野作造賞』、『アジアのなかの日本』(NIT出版)、『ポスト・クライシスの世界』(日本経済新聞出版社)などがある。



Photo by Sujin Kwon

一艘の小型ボートがカリマンタンのクリンジャウ川を行く。――。本号の表紙は、プログラムオフィサーの一人が村から村へと移動しているときに何気なく撮ったという写真。「前へ進めば進むほどに青い空と緑の森林が迫り、気分爽快でした」という。川面を渡る風が爽やかで、どこか気持ちをワクワクさせる風景。森の奥にどんな体験が待ちうけているのだろうか(関連記事は20ページをご覧ください)。

CONTENTS

FIRST WORD ● 田中明彦
危機の続く時代に、日本はどうすべきか …… 2

【特別対談】：奥田碩×遠山敦子
これからの日本と世界、そしてわれわれの役割 …… 4

2011年度アジア隣人プログラム・研究助成プログラム助成金贈呈式開催
よりよい未来へ向けて「対話」の輪を広げよう …… 11

私の研究・活動テーマと方法―助成対象者3名からの寄稿
平井太郎/松本亜紀/原田 公 …… 14

2011「アジア隣人プログラム」
プロジェクトマップ …… 16

2011「研究助成プログラム」
プロジェクト一覧表 …… 18

活動地へおじゃまします！
相互扶助の精神が、
人間と自然との共生を可能にする …… 20

JOINTホット・インタビュー ● グレック・ドボルザー
日本列島とミクロネシアを
研究と芸術でつなぐ架け橋として …… 26

【私のまなざし】② 清水直美
イラン地域社会における聖所信仰 …… 30
～多様なあり方とその変容

東日本大震災に関する取り組み
「人材支援」が復興の鍵 …… 32

トヨタ財団ジャーナル
プログラムの応募状況 / 財団受付の節電対策 /
助成プロジェクトの成果物 …… 36



トヨタ財団会長
奥田 碩

トヨタ財団理事長
遠山 敦子

【特別対談】奥田碩×遠山敦子

これからの

日本と世界、そして

われわれの役割

今、社会は大きく揺らいでいる。

複雑かつ不安定な世界のなかで、われわれの役割とは何か。

よりよい社会を築くために何をなすべきか。

人間として心豊かに生きることの価値を問い直し、

財団設立の原点に還り、その「精神」を探りながら

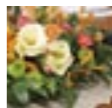
未来へと向かうべき道を考える。

奥田 そうですね。昔から「地球は一つ」と言いますが、じつさいに、

本当の意味でそうなっていました。時代が変わったとおっしゃいますが、確かにそうで、今まで日本の企業は日本国内の市場だけ見て、グローバルゼーションと言いながらモノを日本で作って輸出するだけ。それがグローバル企業だと言っていたわけ。

ぼくは、以前から、現地へ行って現地で生産して現地で売っていかないと、これから日本はだめですよと言いつづけてきたわけですが、やっとなんかそれが理解される時代が来た。口で言うだけではなくて、本当に「現

—— 本日は、今年（2011年）の6月に就任された奥田新会長と遠山理事長との「対談」ということで、日本や世界の現状を視野に入れながら、トヨタ財団のこれからの方向性、担うべき役割といったことを少しゆつたりと、個人的な思いなどをまじえながらお話をいただきたいと思えます。本誌を通じて、よりよい社会を築くための課題や考え方を読者とともに共有し、何かヒントになることをつかみたいというのが本対談の趣旨です。したがって本日はあえて特定のテーマを設けず、むしろ、ご自由に懇談していただくなから、われわれ財団の今後のテーマを抽出し、明確にしていく契機にできればと考えております。



コミュニケーションがうまくいかないと、世の中はうまくいかない

奥田 そもそもぼくと遠山理事長とは縁浅からぬものがあつてね。人生って不思議だな、と思えますよ。こちらが意図しなくても、さまざまところで偶然によく会う人と会わない人がいるけど、遠山さんとは「縁」があるというか、互いが考えていることを、他人事でなくフランクに話せるからよいなあと思つています。

遠山 小泉内閣の「経済財政諮問会議」でお会いして、いろいろと議論をさせていただきましたけど……。あの頃はみなさん、国を良くしようという意気に燃えていましたよ。

それにしても、21世紀に入ったあの頃から社会はほんとに大きく変わりました。20世紀の価値観や、これまでの生き方ではなかなか日本がやっていけない時代に入ってきているなあと感じています。

最近のことでも、「ジャスミン革命」に端を発して、中東の国々で独裁者が次々と倒れたりして、世界の変化の速度と不安定さは増すばかり。日本では民主党政権になりましたが、次々に難しい問題に直面しておりますし……。日本の大震災以外にも、世界各地で地震や洪水など自然災害が続々と起こっていますし、金融界も経済界も今までの大きな歩みがいっつきに滞りはじめたり、総じて、世界全体が大きな転換期にあるような気がしています。

地現物」というかね、そういう姿勢で世界中を見ていかないと会社はやっていけないし、政治もそういうことをちゃんと考えないとだめだと思いますね。

遠山 一国のどこかで起きたことが、すぐに世界中に波及していく。たとえば、ギリシアの財政赤字がEUを困惑させて、EUの困惑が世界の新興国に対して影響を及ぼして、それが日本経済にも影響する。こういうことは、20世紀にはなかった。徐々に広がるということはあつても、今のよう一気に世界を巻き込むというのは新しい現象です。

インターネットなどの通信革命によって、情報が広まる速度が飛躍的に高まったということが大きな要因になっていると思えますが。

奥田 良いも悪しくも、インターネットというのは世界を動かす非常に大きな役割をはたしていますね。最近、フェイスブックとかツイッターとか、ああいうものを通じて、瞬く間に情報が流れ、交換される。ぼくはかねてから、人とモノとカネと情報が瞬時に移動するのがこれからの時代だと言ってきましたが、じつさいに今のその速度たるや恐ろしいものがあります。

カネが瞬時に動くというのはある意味で前からそうだったけど、情報が瞬時に動く、それによって人が動くというのも以前より格段に速くなってきた。そういう環境、状況に世界中が「同時に」なつていく。それに対して方針および政策が追いつかず、対処の仕方がわからない感じで、各国ともはつきりしたスタンスをとれないでいる。そういう、なんとも流動的で不安定な時代に私たちは生きていくのではないのでしょうか。

遠山 ですから、あふれかえる情報の海の中で溺れずに、自分で考え、自分で生き方を選択していく力が今すごく大事になってきています。日々、刻々と変化し動いている社会、そして世界。しかし、それにも関わらず、動かざるもの、動いてはならないものもあるわけですから、どんな変化していく世の中にあつて、変わってはならない「精神（こころ）」とでもいうか……。

奥田 今の若い人は、相手の顔を見てものを言わないでしよう。デジタルな画像や文字ばかり見ることが習慣化してしまつて、生身の人間同士の話ができない。これは非常にまずい。

そんな状態が普通になってしまうと、今度は逆に、フェイスブックやツイッターみたいなものやらないと、社会から疎外されてしまうんじゃないかという気持ちになってくる。ぼく自身、少し恐怖感を持っていますよ。一人になって時間のあるときは、本を読んだり、テレビでも見てればよかったのが、ああいうネットワーク・サービスマミたいのが出てくるとね、社会の中で自分だけオミットされるんじゃないかと、不安な気持ちになつたりね。

遠山 デジタルで手軽につかえるいろいろな通信手段が普及して、インターネット上で種々さまざまな情報が飛びかって、機械と対面することばかりで、隣り合わせの人ともそういうものを介してでないと会話ができないような状況。これでは、なかなか真のコミュニケーションの成り立つ余地がないわけです。

ただ、最近ではそれはマズイってことが少しずつわかってきている。コミュニケーションを復活させて、人と人のつながりを濃密にさせないといけないんじゃないかという反省が出てきているのです。そういう意味でも今は過渡期なのでしょうね。ITを使って、それをベースとしながらも、「信頼」に基づいたもう一段上のつながりをつくっていくことができるようになると、人間はもっと賢くなつてそれが絆となり、精神も満たされていくのではないかと思うのですけどね。

奥田 おっしゃるように、コミュニケーションというのはとても大事。ことに人間の社会生活で、健全なコミュニケーションがなくなつたら大変です。人間同士のコミュニケーションがうまくいかないと、世の中はうまくいかない。つまり、社会はけつして良い方向にいかないと思つています。インターネットに代表されるIT技術は、そういう意味で両刃の剣です。ぼく個人のことを言うと、ああいうものを使わなくともフェイス・トゥ・フェイスで話して、わかり合うことができればそれが一番良いと思つているんですけど、今の時代、なかなかそうはいかない。

しかし今度、ぼく自身が財団の会長になることになって、設立者である豊田英二さんが財団の『10年史』で書いている理念やスタンスをじっくりと読んだのですが、トヨタ財団は設立当初から陰徳派というかね、ひとことと言えば質素に堅実に、人間の文化の根底にある大切なものを護り、次世代に引き継いでいこうというポリシーをもつた財団なんです。時代の要請に応えつつも、その表面上の趨勢に押し流されることなくつていう……。

あれを読んで、なるほどこういう考え方もあるんだな、と感心しました。他に華やかな活動をする財団もあるし、「成果」の見えやすい陽徳な活動をしているところもあるけど、トヨタ財団は陰徳な面をむしろポジティブにとらえ、それをひとつの特長とするというのが良いのではないかと、今のぼくは考えています。ある意味でこういう時代だからこそ、陰徳、あるいは上徳の精神が必要なのではないか、と。**遠山** 奥田会長のお好きな『武士道』の精神としても、「自らを磨く、自らを鍛錬する、弱い者ないしは、公のために働く」というようなことが基本にありますね。それから、いろいろな徳目というのがありますよね。義であるとか勇であるとか、要するに正義とか公正とか。そういうものを柱にして生きる。日本だけでなく、世界の人々がそれらを目標にして、自らを磨きながら生きていくことの価値にできるといういなと私は思います。それが今、とくにたとえば投機筋といわれるような人たちが中心となつて、お金とモノだけが幅を利かせる世界になつてしまつた。もつと儲からないか、もつと、もつと……、ということにあまりにも精力を注ぎすぎて、基本的な人の生き方として、この社会とか人類のためにいいかどうかということを考えずに、もつと多く、もつとたくさんという損得計算ばかりに走つてしまつている。

たとえば、東北の方たちが見せた、あの苦境にあつても他者を慮る気持ちやなくさずに生きるんだというような生き方を、私たちの時代も子の時代もその次の時代も脈々と継承していけるようにしたい。そこに、単に経済力だけでは計れない価値観を見出し、そういう心の豊かさのようなものを世界の人々と共有していけるようになるよといと思います。そういう面で世界から尊敬されたり、信頼されたりするようになるための日本人の精神性をどうやって涵養していくのか。難し



遠山 技術というのは絶対に後戻りしませんからね。新しい技術を良い方向で活かしながら、さらにその技術を越えて、精神的な豊かさや安定を求めることのできるような知恵とライフスタイルが必要になってくると思います。

「徳」と「ノブレス・オブリージュ」そして日本の精神文化

遠山 たとえば、このたびの震災によつて被災された東北の人々が見せてくれたふるまい。物資の配給を受けるにも、列を乱したり、大声で叫んだりということがなかった。大変な悲しみと絶望の中にありつつも、そういう状況であればこそ秩序を乱さずにお互いに譲り合つて、助け合おうという姿勢がありありと見えていましたよね。あの肃然とした行動が、インターネットなどで全世界に広まつて、世界中の人が日本人はすごいと称賛してくれた。

それが日本人の精神性の高さと謙虚な国民性を示すことに貢献した。ですから、なにも大袈裟に喧伝しなくとも、ネットなどによつて、自然に「人々の真実が伝わる」ということがあり、それはよいことだと思ふのです。

奥田 トヨタ財団の仕事と社会とのスタンスのお話につながる例ですね。以前は正直いつて財団つてよく金使うな、なんでこんなにかかるんだと思つていたこともあつたんです。ある意味で活動が地味な分、多く費用がかかっているように見えた。世界の他の財団と比べるとたいたことないのかもしれないけど、それにしても、これだけお金を使うなら「意味」のある使い方をしなければならぬ。そして、それには「徳」というものがなければいかん。ご存知のように、徳には陽徳と陰徳がある。トヨタ財団というのは、助成金の成果がすぐにはつきりとは見えづらい面があつて、財団の活動をよく知らしめるためにも、なんとというか、もつと派手に社会の表に出るような陽徳にしたらどうかとアドバイスをしたこともあつたんです。

課題ですが。

奥田 難しい課題だけど、それは日本人はこれから世界人になつていかなければいけないということでもあると思うのです。日本の独自性とかオリジナリティを重視しろとかいいますが、あまりそういう面にはこだわらず、良いところは良いと残して、悪いところは悪いところ直して行く。それが結果的に、世界に通じる日本の精神文化を継承しながら育てることにつながるようになるのだと思います。

新渡戸稲造の『武士道』に書かれているような精神性というのは、世界のどこへ持つていっても恥ずかしくない立派な日本の文化です。あの本が最初は英語で書かれたものだというのも、今から思うとたいへん画期的なことですよ。

遠山 武士道とか日本の伝統的思想そのものを、そのとおりに現代人が体現し実行するのは無理があるし時代錯誤を認めない。しかし、少なくとも一国を担うべき人々には、武士道そのものとはいわずも、真の「ノブレス・オブリージュ」つまり「位高ければ徳高きを要す」という精神は絶対に必要。政治家に限らず、企業や、さまざまな組織のリーダーには、志があつて、知性があつて、知力があつて、それにふさわしい政策を考えることができ、実現するための勇気があるというのが絶対条件のはずです。国や社会を動かす人にはそういう徳が欠かせない。

東日本大震災を契機に、社会のバランスを取り戻すこと

奥田 最近機会があつて、明治維新を成し遂げた人々についての本を読んでいるのですが、あの時代は立派な人が多いですね。この国をどうするかということに無私の精神で取り組んでいるでしょ。ある面で、ぼくらは反省しなくちゃいけないと思ひます。

ぼくらの世代は戦後の復興期に会社に入つて、何も無い時代からまた始めたわけですけど、あの時代以来、モノと金が先に立つちやつて、あれが欲しいこれが欲しい、そのために、お金が欲しいということですね。会社も儲ける、儲けるという方向に突つ走つて、精神性や文化の方へほとんど目が向かなかつた。あわせて人の心も荒れてきた。そう

いうことがやつと大きな問題になってきたときに大震災が起きたわけです。たいへん不幸なことではありますが、震災は東北だけでなく、日本全体に起こったこととして受け止めなければならぬ。震災が、おかしくなりかかっていた日本人に、自分たちのことを考え直す機会を与えてくれたと言ってもいいのではないのでしょうか。

たしかに日本は一つの方向に偏りすぎていたかもしれない。経済と文化、モノと精神、そういうのを両立させないといけないということが、やつと本心から真剣に問題とされるようになってきたのです。ぼくはそれはとてもよいことで、今をそのバランスを取り戻すひとつのチャンスにすべきなんじゃないかと思う。さつき文化の根底と、陰徳の話をしました。精神文化の方へ社会のバランスを少しでも引き戻す必要がある。

遠山 あの震災を契機に考えなくてはいけないことが三つあります。一つが先ほどから話に出ていた助け合いの大切さ。人は孤立しては生きていけない。支え合わないといけないということ。

それから、やはり福島原発事故。あれは自然災害というよりは、科学技術への過信が生んだもので人災の色彩が強いのですが、その後には、やはり効率主義があつたと思います。科学技術を担っている人たちはもつと謙虚になって、単なる利益優先の効率主義ではなくて、生命の安全とか、人の尊厳とか、自然と社会の共生とか、そういうことを最優先に考える契機にしてほしい。

もう一つは、電力不足になつた時に一般の国民みんなが少しずつ電力を節約したこと。マアタイさんの「もつたない」という言葉が時宣を得て、人々の心に甦つたかのようでした。電力が足りませんと言われたら本来なら怒るところなのに、黙々と電気のスイッチを切るようになりましたよね。これは日本人のすごいところで、これからのエコ社会を生き延びていくための一つの利点。いざとなつたら自ら欲望を抑制できる、これは武士道にも通じる日本人の優れたメンタリテイと言つていいでしょう。

この三つのことを学びとして、きちつと心にとめおくことが必要だと思いますね。そうすれば、日本はまだ変わる、そのチャンスはあると信じています。

奥田 それで、たとえば典型的なのは、恋愛問題。われわれの時代は、一つの恋が破れたら生きるか死ぬかっていうハムレットみたいな切迫感があつたけど、今は、今日付き合つても明日は知らないみたいな、あつたらんかとした感じでしょう。もちろん、人によるでしょうけど。愛もそうだし、死もそうだ。ともかくわれわれは、人はなぜ生まれ、なぜ恋をし、なぜ死ぬのか、なんていう哲学的な問題を若い時から抱えて、悶々と考え悩んできましたよね。今はどうなんでしょうね。

遠山 奥田会長から恋愛の話が聞けるなんて滅多にない機会（笑）。もう少し聞かせてください。

奥田 ぼくらの時代の理想の男性像というのと、一つは姿三四郎だったんですよ。柔道をやっている人以外もね、富田常雄の本をみんな熱中して読んだんです。黒澤明が映画にもしていますけど、男というのはこういうものだという典型がそこにある。恋人も乙美^{おとみ}という、ああいう女性がいて、そんな女性が奥さんになつて、男についてきてくれるつていうね……。ただ、あれは、今考えたらあまりに古い。今の日本人はああいう風に同じにやる必要はないですね。お互いに結婚して仕事も育児もしたかつたら、二人で協力してやればいいんだし。

ぼくが言いたいのは、三四郎が自分から蓮池に飛び込んで夜が明けるまで水から出ずにひとつのことを考える、というような真剣さというか、ものごと苦勞を厭わず熱中して取り組む姿勢が人生の偏差値を高くするつていうことなんです。それが人の心も豊かにするんじゃないか。現代はそういう濃密な人生経験をする場も機会もどんどんなくなつてきているような気がします。なんでも欲しければ与えるという親や、自分で考え、自分の力で手に入れるという自発性を育てない今の学校教育にも問題があると思います。

遠山 東北の方々のような例がある一方で、極端な言い方をすれば、物質的に豊かな時代に育つて、欲しいと思つたものはなんでもすぐ手に入る、特にお母さんたち親がなんでもしてくる、面倒な



奥田 それも日本人の秘めた特有のバランス感覚なのかもしれない。今日は、まさに変化の途上にある。ぼくはトヨタ自動車の社長時代から「変えろ！」と言つてきた。もちろん良いところは変えちゃいかんけど、変えるべきはすばやく変えろと言いつつ続けて今まで来ました。しかし、自分を変えることにはやはり誰もが臆病になるんですね。それをあえてやるかやらないか、それはその人が持つている志次第なんですよ。



ものごと真剣に取り組むことが「人生の偏差値」を決める

遠山 志がしっかりしていれば揺るがない。おつしやるように、これはと感じたことは思い切つてやってみる、そういう勇氣も必要ですね。日本は、戦後の瓦礫の中からさまざまな困難を乗り越えてきた。同様に今回の震災による災禍も乗り越えないといけないし、それができると信じています。しかし、そのさいに大事なのは、近視眼的で単純な目標へのダッシュではなくて、常に複眼といいますか、会長の言葉をお借りすれば、全体のバランスといったことを配慮しながら前に進んでいくことが重要です。経済性も大事だけど精神性も大事、自己も大事だけど他者も大事、効率も大事だけど人の命はもつと大事……。画一的に一色で染め上げられたような生き方や暮らしではなく、多様な要素が補完し合いながら共存するような、そんな成熟した社会になつてほしいと思います。

なにかと苦しい状況ではありませんが、日本は今でも経済的には豊かな国。今のうちにそのための知恵をくみ取り、本当の叡智を身につけないといけないですね。企業もそうでしょう。

奥田 通常、企業が人を採用する時に欲しいのは、その人の知力とか行動力。それらも大事ですが、本当の叡知ということも言つてもう一つ大事なのは、「人生の偏差値」の高い人であること。そういう人が欲しい。学校だけでなく、今までの人生経験のなかでどういう勉強をしてきたか。

遠山 人生の偏差値、いい言葉ですね。人生の偏差値とは何か、というテーマを研究課題にしているプロジェクトはないのかしら（笑）。

ことはすべて人にやつてもらおうという生活環境のなかで、自己中心的な人も増えている。他の人も自分と同じように考えて生きている人間だというふうな考えが及ばない。自分と同じように考え、感情を持っている、そういう存在と付き合いということへの畏れ、人を敬う気持ちや、生きていること自体に対する感謝の念がなくなつてきているような気がします。他者と向き合い、自己の欲望をコントロールすることの学びを積み重ねていくことで、はじめて生きていることに対する謙虚さが持てるのです。そのことをみんなが気づき悟つていかないと、社会は殺伐とする一方ですよ。



心の豊かさや精神性を高めることにつながる助成活動を！

——この辺でお話のまとめに入りたいと思います。われわれ民間の助成財団がよりよい社会をつくるために何をしたらよいか、何ができるのか。トヨタ財団はこれからのような方向に向けて活動を行つていくのがよいとお考えですか。

奥田 基本は豊田英二さんと神谷正太郎さんの起草した「設立趣意書」の趣旨でやればいいんじゃないかな。先に言つたように、社会をよい方向に変えるためにも、むしろ財団のベーシックな部分を変える必要はないと思う。時代を読むということ、目的に沿つた助成活動のより有効な方法を探る必要があるだろうけど、財団は現代社会の問題を早くから先取りしていたようにも思うし、英二さんや設立時に苦勞された方々の掲げた理念には共感する点が多い。ぼくもその高い志を引き継いでいきたいと思つていますよ。

この間も、ぼくにとつては財団のはじめての公式な行事である「助成金贈呈式」に出席して、じつさいにみなさんに会つて驚きました。いろいろな国のいろいろなプロジェクトがあつて、どれもがみないところを持つていてね、感動しました。

*トヨタ財団設立当時の旧トヨタ自動車販売株式会社社長。トヨタ自動車設立時に国内販売体制を築きあげた。

いろいろな国や地域、そしてさまざまな領域の人々に応募してもらって、それを助成し応援するのは非常に意義のある大事なことだと再認識しました。

これからのことでいえば、助成金を受けた人同士の交流の機会をふやしたり、ネットワークで人や組織をつなげて、なにか一緒にできるといいですね。ウェブや広報誌などのメディアを有効に使用して成果や情報を蓄積し、社会に発信していくことも大事なことはないかな。

遠山 助成財団は、いろいろな人たちに手をあげてもらって、個々によりよい未来のためになると思う研究や社会活動をしてもらえばいいというのも一つのあり方なのですが、さらにそれを普遍化し一般化した用に立てるのが、公益財団法人としてのわれわれの役目じゃないかなと思いますね。

助成した人には、簡単に短くてもよいから成果をきちんとアピールしてもらって、それを財団が蓄積していったら、構造化していけるとよいのではないのでしょうか。人と人のつながりをどう作っていくか、コミュニティをどう築いていくかからはじまって、東南アジアなら東南アジアのいろいろな課題を抱えているところが、たとえば環境や文化をどう護り継承するか、人々の貧困をどうするかなど、それぞれが成功例と失敗例ともどもこんな風にならなくていい成果を蓄積していく。それにはマイナス面もあるかもしれないけど、プラスの面のほうがずっと大きいはず。活動成果の足跡を残し、課題が普遍化されることによって、他の地域やプロジェクトの人がそれを学びながら、さらに良い活動につなげていくことができる。一回限りで自己完結させてしまわないで、持続的に成果を積みあげて「外」に開いていくということをやるべきだと私は考えます。

とくに、たとえば地域社会の問題というのは、普遍的なかたちで類型化して共有できる場所があると思うんですね。いかなればそのような「知」のつながりがシステムとしてできてくると、トヨタ財団の「宝」



知的な作業を行ったうえで、次のステップにつなげていくことが必要なのではないかしら。

どんな反応がくるかわからないからといって、成果に対する評価を恐れすぎたいいけないと思いますね。そのような蓄積は、財団や助成対象者にとって大きな意味を持つだけでなく、一つ一つの成果の総和がよりよい社会を築くことにつながっていくと考えることが肝要です。公益財団法人の役割とは、そういうものではないかと思うのです。

成果といっても、長大な論文である必要はないわけですし、その点助成対象者とプログラムオフィサーとでしっかりと議論してもらって。テーマや課題を社会に広く伝え共有することが重要なのですから。

奥田 トヨタ財団は設立から37年、地道ながらも多くのさまざまな助成活動を行い、いくつか立派な成果をその長い歴史に刻んできている。そのことに自負心をもっている。しかし、われわれの活動にこれだけいいという終わりはないわけです。ぼくも、いま理事長が言われたことはきわめて正しいと思う。過度に自己アピールする必要はないし、陰徳がいい。しかし、新しいことに挑戦する気持ちを失わずに、財団の活動が活発になることが人の心の豊かさや精神性を高めることにつながり、それがさらによりよい社会づくりにつながるんだという意気込みのなかで、来るべき40周年を迎えたいものです。課題は、そのときにわれわれは何を遺すことができるか、ということですね。

◎司会：野々宮彰彦（トヨタ財団事務局長）

2011年度アジア隣人プログラム・研究助成プログラム助成金贈呈式開催

よりよい未来へ向けて 「対話」の輪を広げよう

10月19日（水）トヨタ・オートサロン・アムラックス東京5階アムラックスホールにて、「2011年度アジア隣人プログラム・研究助成プログラム助成金贈呈式」を開催しました。開会にあたり、まず当財団常務理事伊藤博士より挨拶、続いてプログラム部長渡辺元から、当財団の設立趣旨と「ビジョン2010」（2010年6月策定）にこめた思い、ならびに助成プログラムの概要紹介があり、その後、第一部パネル・ディスカッション「よりよい未来に向けた、効果的なプロジェクト運営のあり方について」、第二部「助成金贈呈式」が実施されました。



【第一部】パネル・ディスカッション

パネル・ディスカッションでは、平井太郎（2008年度研究助成プログラム）、松本亜紀（2010年度研究助成プログラム）、原田公（2009年度アジア隣人プログラム）の3氏が当財団事務局長野々宮彰彦のファシリテーションのもと、プロジェクトを実施するなかで直面した課題や、それを乗り越える過程で考えたプロジェクト運営において重要な点について議論を展開しました。

発表者のプロジェクトは、16世紀上水道についての国内外における調査ならびに小田原

個人研究による地道な基礎研究、原田さんは、海外のフィールドにおける実践活動とそれだけに違ったものです。

ディスカッションでは、主としてリーダーシップのあり方とコミュニケーションという観点で、それぞれがプロジェクトを通して感じたことをお話しいただきました。

平井さんは、研究者の役割を「皆が共有できる価値を提示する」とことと位置づけ、その結果、それぞれ違った想いで参加しているメンバーをまとめることができたとお話されました。「研究を進めていくうえで、ミッションがしっかりとっているのであれば、プロセス



● 平井太郎 (2008年度 研究助成プログラム)
[助成題目]「オルタナティブ近代化遺産」を活用した持続可能な都市環境の構想——16世紀の上水設備の再生を通じて、水路と共生する生活や交通の再創造を図る



● 松本亜紀 (2010年度 研究助成プログラム)
[助成題目]島で「産む」こと、島で「死ぬ」こと——東京都青ヶ島村における「誕生」と「死」の場の変遷と死生観の変容について



● 原田 公 (2009年度 アジア隣人プログラム)
[助成題目]カンパール半島の伝統的生業と文化を維持・発展させるためのエスニック集団のネットワーク形成——大規模森林開発による環境影響を低減させるための地域組織化とキャパシティ・ビルディング

* 上記3名のプロジェクトの詳細については、14-15ページにそれぞれの報告を掲載しています

の部分、研究体制であったり、一つひとつの実施する内容というものは、当初の計画からの変更もありうるのだと思います。ただし、なぜ変更せざるを得ないのか、それをきちんと説明することができなければなりません。また、研究者としての立ち位置を明確にすることが今の時代問われていると思います。一人ひとりの研究者がそれぞれ自分で答えをみつけていかなくてはならないと思うのですが、あたえられた1年なり2年なりという期間の間に、どれくらい自分自身を内省していくことができるかが重要だと考えています」と会場のみなさんの「先輩」として語られました。

松本さんは「ただ、ただ話を聞くという自分の姿勢をぶらさずにいること」を強調されました。「現地調査などの過程で必ず何かしらの困難にぶつかることがあると思います。そのとき自分のなかの軸をぶらさず、できることに粘り強く取り組んで、それを前向きに

継続していくことが大切なことだと思つていきます。私の場合、島の人たちに問題提起をしまつた以上、お聞かせいただいた話をまとめる責任があります。それをどういう形でアウトプットしていくのがよいか、いままぎにいろいろと考えているところです」と、些か緊張した面持ちで、しかし熱く決意を述べられました。

原田さんは「自分自身の反省をこめて地域住民と同じ目線に立つことが重要」と述べ、「このプロジェクトで実践活動をはじめて、現地に関わることの責任はこれまでと段違いに重いものでした。なにはともあれ、まずは現地の人々とのコミュニケーションの密度をこれまで以上に高めていく必要があります。しかし、現地と言っても私たちの場合その範囲は広大なので、当地のNGOと協働しながらということになります。そのため、自分自身がカウンターパートを統括指揮することのできる能力をしっかりと身につけていきたい

と考えています」と静かに話す語り口が印象的でした。

平井さんが語られた「研究者としての立ち位置が問われている、それを内省し続けることが重要である」という言葉は、3人に共通する真摯な姿勢を要約しているようにも感じられました。それはまた、研究者に限らず、会場にいたすべての人にとつて貴重なメッセージになったのではないかと思います。

最後に、ファシリテーターの野々宮事務局長からの言葉でパネル・ディスカッションは終了しました。「トヨタ財団の助成を受けるということをきっかけに、情報を交換したり交流し合ったりしながら互いに影響を与え合う、そんな関係ができれば私どもとしても大変にうれしいことです。それが新しい明日をみんなの力で築いていくことにつながっていくと信じているからです。みなさまの活動がよい成果をあげられることを願っています」

【第二部】助成金贈呈式

贈呈式は、奥田碩会長の挨拶、選考委員長による選考報告の後、遠山敦子理事長から参加者全員への贈呈書授与が行われました。会長からは、「活動の成果がこの社会をより良い方向に導くものとなって欲しい」そのためにも「これで充分ということではなく、一生懸命に取り組む、1+1=2ではなく、3にも5にもなるよう、未来を良くするために徹底的に汗をかいてもらいたい」と、助成対象となった方々へ激励をこめたメッセージが話されました。

桑子敏雄東京工業大学教授（研究助成プログラム）は、選考経過について説明した後「プロジェクトの大切なところは、決められた期限の中で一定の成果を示し、自分自身

が継続して実施している研究とは違う一つのオリジナルなユニークな成果を出すことである。そのためにもステークホルダー、チームのメンバーのマネジメントが重要である」というお話をされました。

三好皓一立命館アジア太平洋大学教授（アジア隣人プログラム）は、「選考の過程では、現場がよく見えて、どのように進めていくか、その結果どのような成果が期待できるのかといった現実が具体的によくわかるプロジェクトを高く評価した」こと、「トヨタ財団のプログラムオフィサーとより良いコミュニケーションをとりながらいい成果をあげて欲しい」とコメントされました。

その後、遠山理事長から「財団とコミュニケーションを図りながら、助成期間さらにはその後も良きパートナーとして、ともに社会

に貢献できるよう、それぞれの研究や活動を、力強く進めて欲しい」というメッセージがあり、参加したプロジェクトチームそれぞれに贈呈書が手渡されました。

贈呈式終了後には、日本各地のみならずモリゾル、インドネシア、中国と遠方からご参加いただいたみなさんも交え、参加者同士の情報交換が活発に行われました。

私たちがプログラムにこめた「よりよいアジアの未来を目指して」（アジア隣人）、「よりよい未来を築く知の探求」（研究助成）という思いは、助成を受けて研究・活動される方々の成果が幾重にも重なり合い、はじめて実現されていくものです。そのためにも、贈呈式という場にとどまらず、今後もさらに財団と助成対象の方々との間の対話を積み重ねていきたいと考えます。



①奥田碩会長 ②桑子敏雄 東京工業大学教授（研究助成プログラム） ③三好皓一 立命館アジア太平洋大学教授（アジア隣人プログラム） ④遠山敦子理事長（左）による贈呈書の授与 ⑤助成対象者の方々との記念撮影

2008年度研究助成プログラム



水路の再生で
社会のあり方を問い直す

◎平井太郎

日本女子大学学術研究員・講師。小田原市歴史まちづくり協議会委員

水路の再生は、アメニティ向上などにとどまらず、私たちの生き方や社会のあり方を問い直すきっかけになる——このプロジェクトの初期に漠然と抱き、次第に明確になつてきた問いはこのようなものでした。

プロジェクトではまず、水路を通じて集落や都市の水を確保する方法が、日本そして世界にどのように分布するかを調べ上げることから始まりました。こうした視点からの体系的な調査はこれまでなく、仙台から鹿児島まで日本の18都市、さらに中国の3都市の現地にも飛び史料と現況を調査してゆきました。

その結果、水路を使う方法の起源は中国宋代の都市群にあり、近世日本の経済的な発展とともに生れた都市群の半数に浸透した方法だということなどがわかってきました。この方法で最も重要な点は、一つの利害集団だけの、また短期的な利便性や効率性が重視されず、複数の目的があえて設定され、日常的な



小田原市の水路あるき

ところで、生活圏内に医療機関がないということは、「誕生」前後のみならず「死」を迎えるたびに生活の場を離れることを強いられ、その間を身近な家族とともに過ごすことを困難にする。死を目の前にした島民の多くは、島で家族に看取られることを希望しながらも介護・終末・臨死期を島外で過ごさねばならず、家族や地域の人たちもその死を実感しにくいという。

そこでプロジェクトでは、青ヶ島に「近代医療」という観念がもたらされた昭和40年代に焦点を合わせ、タビゴヤが支えてきた伝統的な出産習俗や産育儀礼とそこに表出する家族・人間関係の変化、また「誕生」と「死」が生活の場から切り離されたことで生じたと推測される、島民の生老病死に対する意識の変容と、その背景を明らかにしたいと考えている。

島民に対する調査からは、タビゴヤの利用目的や産後の養生法などが現代の妊娠・出産に通用するものであること、また、ケガレ観のみでは説明できない伝承の実態の示唆、また、可能であるならば出産時も死ぬときも家族と一緒に過ごしたい、という島民の声を聞くことができた。

なかでも、タビゴヤが支えてきた世代間の交流、義理の親子関係が担ってきた一人の人間の一連の成長を継続的に見守る、という役割の喪失と、現在の島民の死生観や子育てに対する不安感との関連性が浮かび上がってきた。今後、この点に着目しながら調査を進めていきたいと考えている。

管理の実績やその過程で蓄積された知を重んじて目的間の利害が調整されていた事実です。

次なる課題は、こうした「水路の知恵」とも呼ぶべき方法を現代に生かし、水路そのものの再生につながることでした。具体的には神奈川県小田原市の旧市街を500年にわたる流れ続けている小田原用水の検証と再生に取り組みました。小田原用水は日本で最初期の都市生活用水路と言われているものの、文献的裏づけがないという理由で文化財として認知されず、日一日と暗渠化されつつあります。これに対し当初は環境再生の視点から住民や行政にアプローチしましたが、環境と利便性の対立を乗り越える視点を示せず理解が得られませんでした。

しかし調査を通じ日本と中国の「水路の知恵」が明らかになるにつれ、①まずは水路をどのようなかたちでも再び利用しはじめること、②使うことが軸になつていた「歴史」を継承することの重要性を住民や行政の方に伝えることが可能になりました。具体的には現地を歩きながら価値観をすりあわせる「まちあるきワークシヨップ」を十数回重ね、「歴史まちづくり法」にもとづく計画にも水路再生が盛り込まれたのです。

それらはプロジェクトの推進力ともなった「現地を共に歩く」経験の重要性を再確認できる記念碑であるとともに、自らの生き方と社会のあり方をたえず問い直す、息の長い取り組みとしての水路再生に向けた橋頭堡だと感じています。

2009年度アジア隣人プログラム

生活の拠り所としての「村落林」

◎原田公

熱帯林行動ネットワーク(CATAN)プロジェクトリーダー



熱帯林行動ネットワーク(CATAN)プロジェクトリーダー

インドネシア・スマトラ島のリアウ州の広大な泥炭湿地帯、その一角を占めるケルムタン地域は、現在、州のパルプ産業によるHTI（産業植林事業）とアブラヤシ農園の拡大化策のために、森と河の自然環境に依拠してきた伝統文化が大きく変容しようとしている。アジア隣人プログラムの助成を受けて JAFAN ではこうした伝統的な村落に対して、おもにキャパシティ・ビルディングの支援活動を通して住民たちが生活の拠り所としている森林のアクセス権の確保と、森林の持続的な利用を促進するサポート活動を続けてきた。

開始からの10カ月間、ケルムタン鳥獣保護区の拡大を志向するなかで周辺村落のネットワークキング、キャパビルを構築するために、各ステークホルダーに対して信頼関係の構築、働きかけを行ってきたが、にわかに認識の大きな違いにつきあたる。地元コミュニティにとつて森林は、アクセスを許さない保護区とされるべき存在ではなく、彼らの伝統的な生業を支える「保全しながら利用していく」アクティヴな生活圏の一部であることに気づかされた。

この「気づき」はプロジェクトを路線変更せざるを得ない大きな契機となった。これ以降、プロジェクトは「村落林 (hutan

2010年度研究助成プログラム

島における
生老病死の変容

◎松本亜紀

（社）倫理研究所研究センター専門研究員



青ヶ島では昭和30年代後半頃まで、女性が初潮を迎えるとタビゴヤ（他火小屋）と呼ばれる隔離小屋で月経期間を過ごすのが慣習であった。この時女性は、誕生時に一生涯の付き合いを前提として義理の親子関係を結んだ後見人の年配女性とともに、一定期間籠もるのである。また、同様に昭和40年代前半までは月経時や出産時をタビゴヤで過ごしていたという。

従来の研究は、濃厚なケガレ観を有する青ヶ島のこれらの慣習を「ケガレ」からの隔離と説明してきたが、昭和40年代を境とする島の近代化と過疎化の中で、タビゴヤは不衛生で悪しき因習として撤去されてしまう。そして昭和47年を最後に里帰り出産や島外出産が慣例となり、分娩や入院に対応できる医療体制が整っていない



島内の神社
現在、妊産婦は検診や出産後に離島を余儀なくされている。

「Dosa」の申請・登録を目指す支援活動へと舵を切ることになる。「村落林」はそこに暮らす住民に、森林の管理権を与える法的なスキームである。近年、隣のジャンビ州や西スマトラ州では林業省による「村落林」の登録事例が相次いで報告されているが、企業による大規模開発が拡大しているリアウ州ではいまだ先例はない。登録を得ることはおろか、県政府への申請すらもこれからいくつものハードルを越えなければならぬ。現在は、マッピングによる村どうしの境界線の策定や、コミュニティ間の「村落林」制定に伴う利害調整などを行っている。

同じケルムタンに位置するコミュニティでも、村に隣接する企業によつて森林への需要圧力が異なることから、「村落林」に対する「温度差」がある。利用形態・頻度も違うので、申請に向けて異なる「村落林」をひとつのまとまりとして合意させるのに大変な努力を要する。緒に就いたばかりといえるかもしれない。しかし、このスタート地点に立たせてくれたトヨタ財団に感謝を申し上げたい。



ケルムタン泥炭湿地内のゴム園

2011「アジア隣人プログラム」プロジェクトマップ

2011年度に採択された「アジア隣人プログラム」のプロジェクト(22件)の一覧です。

*地図上の数字は、表の各プロジェクトの活動拠点に対応していますが、実際の活動範囲は複数の地域をまたいだ広範囲に渡ることがあります。

*各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブ・サイトをご覧ください。

	代表者氏名	題目	活動拠点	助成期間
①	ジョベリン・クレオフェ	北サマル州のラヴェザレス地域における海藻養殖による持続可能な社会的企業の確立に向けて	フィリピン	2年
②	キース・スウェンソン	生命の水——ダルキッド渓谷地域における水源保護を目的とした自然環境回復プロジェクト★	モンゴル	2年
③	永石 安明	中国内モンゴル砂漠化地域におけるコミュニティ形成を通じたふるさと再生事業★	中国	2年
④	ノルブ・シリ	湖南省桃源県沅江におけるエコツーリズムを通じた持続可能なコミュニティ開発	中国	2年
⑤	山本 芳華	ベトナム版環境マネジメントシステム規格の創設・自主運営を通じたアジア諸国の環境ネットワーク構築を目指して——ベトナム・ダナン市域における環境マネジメントシステムパイロット事業より★	ベトナム	2年
⑥	古澤 浩一	養蜂業を組み込んだアグロフォレストリーの実践による焼畑の削減と地域住民の生活改善★	ラオス	2年
⑦	セバスチャン・デュフィヨ	ラオスにおける象の持ち主に対するエンパワーメントおよび象の総数を増加させることを目的とした象使い組合および職業訓練センターの設立	ラオス	2年
⑧	サラ・ホッジ	ラオス・ウドムサイ県の7つの地域における障がい児の通学を容易にさせる改良プロジェクト	ラオス	2年
⑨	吉川 健治	ラオスにおける現地 NGO とラオス進出外国企業との連携による障がい者自立支援プロジェクト★	ラオス	2年
⑩	ロミー・グロスバーク	カンボジアで危険にさらされている少女たちを対象としたエンパワーメント——最も取り残されたコミュニティの若手女性リーダーの育成	カンボジア	2年
⑪	村田 早耶香	カンボジア・ソトニコム地区における、最貧困層の自立支援とソーシャルエンパワーメントプロジェクト	カンボジア	2年
⑫	コクサンロン・バドゥンサク	パワーキッド——縫製・手工芸技術を用いたタイ在住ビルマ人移住者の若者たちへの企業家精神教育プロジェクト	タイ	2年
⑬	林 健太郎	ミャンマー・モン州における HIV 感染者支援のための 民間救急搬送事業★	ミャンマー	2年
⑭	野澤 暁子	バリ島の過去と未来をつなぐ絵本文化導入プロジェクト——現地芸術家・教育者による農村民話の絵本製作と幼稚園での貸し出しを通じた親子間の絆と文化伝承の推進	インドネシア	2年
⑮	ウイラティエイ・プティジャント	インドネシア農村部における持続可能な水資源、食の安全、そしてエネルギーの管理を確立するための生態系に配慮した実践の推進	インドネシア	2年

	代表者氏名	題目	活動拠点	助成期間
⑯	ユスティニア・ヨニック・メイラワティ	インドネシア、バンドン市ババンカサリ区における家庭内ゴミ処理のためのコミュニティが中心となった教育訓練・支援プロジェクト	インドネシア	2年
⑰	青山 勲	NGO (COINN) と公民館活動のノウハウを活用した「人づくり・組織づくり・地域づくり」——開発途上国でのノン・フォーマル教育による地域力向上・再生★	ネパール	2年
⑱	ブラサナ・ヨンジン	持続可能な発展、環境保全および天然資源管理のためのグリーン・ジョブの創出	ネパール	2年
⑲	馬場 繁子	障がいのある子どもたちと家族の社会参加と地位の向上——地域社会の一員として認め、認めあえる出会いの場をつくり、社会との絆を強め、ゆとりを持ち障がいのある子どもたちを育てられる地域社会とする★	スリランカ	2年
⑳	シャシカント・アハンカリ	インドのスラム街におけるコミュニティリーダーのエンパワーメント	インド	2年
㉑	三宅 隆史	アフガニスタンにおける児童図書の本質改善事業★	アフガニスタン	2年
㉒	ジェイブド・ハッサン	パキスタンにおける若者のピア教育を通じた平和構築	パキスタン	2年

題目に★印のあるものは2国以上枠助成を示す。その他は1国枠助成

代表者氏名	題目	助成期間
【共同2】		
クロイワ・ヤマサト・アリシア・イザベル	環境保全のための「エデュテインメント」——動機づけと芸術を通じた生物多様性の世界的ホットスポット（アンデス山脈のタンボバタ上流域）への移住者の認識と態度へのはたらきかけ	2年
シャリ・ジャマール・アブドゥル・ナシル	イスラームのハラール食——ビジネス戦略によるイスラーム社会と非イスラーム社会の調和	2年
小森 陽一	東アジアの新たなコモン（共同性）とはなにか——現代の「民主」と「主権」の概念をめぐる日中共同研究	2年
【個人】		
李 蓮花	東アジアのケア・レジームに関する比較社会政策的研究——日中韓の育児ケアを中心に	2年
スチャノカオ・スチボン	東南アジア地域におけるヒ素汚染度予測モデルの開発	2年
横田 香穂梨	子ども自身による路上と異なるもうひとつの生き方の主体的な構築を目指して——ブラジル北東部レシフェ市におけるストリートチルドレン支援 NGO の思想と実践に関する研究	2年
田村 民子	日本の伝統芸能に用いる道具類の希少技術を未来へ継承するための技術保存ネットワーク・プラットフォーム構築を目指す研究——衰退危機に瀕する能楽・歌舞伎の道具についての研究	2年
娜荷芽	内モンゴルにおける学校教育の近代化過程——1930～40年代を中心に	2年
南 誠	歴史認識の対立を越える人びとのつながりの発見と構築——満洲の歴史と記憶の日中比較研究をととして	2年
アイン・トゥアン・ホアン	17世紀ベトナムの初期近代グローバリゼーションにおける「ジャパニーズ・ファクター」再考	2年
李 惠慶	韓国の文化空間におけるベトナム戦争の記憶と表象——テキストの政治的無意識と国民的アイデンティティの再構築 / 変容を中心とする文化社会学的比較研究	2年
須藤 義人	霊性のコモンズ——琉球弧における「シマの生態民族誌」の制作	2年
吉田 早織	東京23区の児童遊園の地域性と構造に関する研究——子どもの外遊びを促進させる児童遊園の可能性	2年
バク・ヒュンギ	2つの都市の物語——北東アジアにおける中露国境地域の移住者と地元住民との地域的交差に関する民族誌学的アプローチ	2年
林 恩廷	高レベル放射線廃棄物の行方——1990年代以降青森県六ヶ所村での核燃料サイクル関連施設事業を通して	1年
ダマヤンティ・エリン・カタリーナ	地元住民の生計向上を目的とした社会経済および文化的アプローチによるラフレシア保護に向けた政策提案	2年
石原 広恵	コモンズを通じた「新しい」絆の模索——イギリスと日本を事例として	2年
分藤 大翼	先住民文化の普及と保護に果たす映像メディアの役割に関する研究——カメルーン共和国のパカ族の事例を通じて	2年
李 善姫	震災後の東北地域における「多文化共生」と「トランスナショナル・家族」の可能性に関する考察	2年
リウ・ジャンシン	中国のデジタル社会における社会参加、変化および発展——中国のブログ界分析	2年
橋本 隆子	ソーシャルメディアにおける東日本大震災の評判分析——インターネット動画からの評判抽出	2年
長谷 知治	海洋汚染に対する損害賠償の在り方——原子力発電所を中心に海底油田、船舶起因の事例を比較して	1年
井上 航	北東カンボジアで考える森と精霊と人——音を発すること、音のなかにあること、「場所」を感じることをめぐる音楽民族誌の試み	2年
山口 未久	地域で暮らす重症障害児・者の自立生活へのプロセスにおける当事者性と支援の検討——筋ジストロフィー患者を対象に	1年
竹峰 誠一郎	被曝地域の未来をどう拓くのか——米核実験場とされたマーシャル諸島を訪ねて	2年
クロス 京子	移行期正義の発展とトランスナショナル・アドボカシー・ネットワークの役割——正義、真実、和解をめぐるたたかい	2年
楊 小平	アジア諸国における平和展示と実践の比較研究——中国・日本における平和表象を事例として	2年

2011「研究助成プログラム」プロジェクト一覧表

2011年度に採択された「研究助成プログラム」のプロジェクト(47件)の一覧です。

*各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブ・サイトをご覧ください。

代表者氏名	題目	助成期間
【共同1】		
丹野 清人	日伯二国間のスムーズな人の移動に資するキャリアの接続・コミュニティの接続・制度の接続の研究	2年
山田 浩世	沖縄・奄美島嶼社会における行政防災施策・制度・システムの歴史の変遷に関する包括的研究	2年
南 基泰	ヴェトナム・カッティエン国立公園に内在する生態系サービスの遺伝資源ポテンシャル評価とその持続可能な利用法の確立	2年
棟居 徳子	包括的な地域型性暴力被害者支援体制の構築に向けた研究——神奈川県における取り組みを題材に	2年
金山 智子	災害とコミュニティラジオ——地域を越えたコミュニティメディアの支援システム構築をめざして	2年
杉村 美紀	紛争後のスリランカ平和構築と持続的発展に関する高等教育・人材育成のあり方とは——「マレーシア・モデル」との比較分析を通じた国際共同研究	2年
ファン・トゥエット・ヌン	ベトナム農村部における高齢者の健康問題および健康管理サービス	1年
金田 明大	東日本大震災で被災した歴史資料・文化遺産の保全と復興を通じた「防災遺産学」の形成——文化復興活動を支援する持続的な情報システム利活用の実践	2年
小泉 二郎	国の支援の対象外となる希少難病の研究基盤整備に向けた体制モデルの構築	2年
高橋 睦子	親権制度の国際比較研究——子どもの発達に資する政策提言に向けて	2年
カムンデ・フレデリック・ンジェル	過去40年間のケニアにおける「教育の周縁化」問題——初等教育へのアクセスと修了に影響を与える文化的、社会的、経済的、政治的な要因について	2年
杜 創国	日本の地方自治体における市民参加による行政評価の研究——日本の制度を参考に中国での公共サービスの向上を目指す	2年
【共同2】		
小川 晋史	琉球諸語表記法プロジェクト——多様な方言からなる琉球諸語を統一の規格で書き表わせる一般向け表記法の構築と今後の普及のための基盤づくり	2年
江上 幹幸	インドネシア、ラマレラ村における伝統捕鯨文化の変容	2年
鹿毛 敏夫	日・中・韓共同による東シナ海域沈没船調査——国家を介さない日中交流史	2年
今井 友樹	鳥と人のある「境界」を巡って——人の暮らしを支える「いのち」と「地域性」の考察	2年
ゲエン・チー・ベン	中越国境地域におけるキン族の伝統的な祭りと共同神の崇拜	2年
守川 知子	ペルシア語旅行記に見るもうひとつの世界観——近世インド洋海域の宗教・交易ネットワーク	2年
大石 学	時代考証学の確立とその方法論的研究	2年
富永 望	すばる望遠鏡超広視野撮像カメラ Hyper Suprime-Cam を用いた超新星爆発の検出と初期宇宙における超新星爆発を用いて得る宇宙進化の新たな知見	2年

相互扶助の精神が、

人間と自然との 共生を可能にする

● 権修珍(トヨタ財団プログラムオフィサー)

アジア隣人プログラムは、2003年度に研究助成プログラムの特定期題「アジア隣人ネットワークプログラム」としてはじまり、2005年度から独立して運営されています。2011年度は、「よりよいアジアの未来を目指して」というテーマのもと、アジアのコミュニティが抱える課題の解決に、隣人とともに取り組む実践的な活動を支援しています。具体的には、「人材育成」「環境」「社会システム」の3領域を設定し、アジア諸国の多様な課題の解決や、課題解決の土台作りに寄与することを目的としています。

私は今回、インドネシアの活動地域を訪問しました。インドネシアは、日本の5倍ほどの国土と2億3750万の人口を有する大国です。また、大小さまざまな島からなる世界最大の島嶼国でもあります(※25ページの地図参照)。アジア有数の多民族国家でもあり、言語も地域によって異なります。この国でのアジア隣人プログラムの助成による活動は、持続可能な農業、森林保全、文化保存などテーマはさまざまですが、なかでも環境に配慮した、自然との共生を目指す活動が多い印象を受けます。

本稿では、2011年10月21日から10月30日に訪問した、東カリマンタンとジョクジャカルタ近郊の活動地に、読者のみなさんをご案内します。



【訪問先】
インドネシア共和国
東カリマンタン州

【助成題目】
インドネシア東カリマンタン州における、慣習林の村落林としての登録と運営を通じた住民による持続的な森林利用・管理のモデル・ケースづくり

「村落林制度」を活用して森林と生活を守るために

成田を発ってジャカルタで1泊。2日目は、飛行機で1時間40分ほどのカリマンタン(英名でボルネオ島)のバリクパパンへ移動し、さらに車で3時間ほど北に走って、サマリタ市に着きました。ここで行われているのは、日本インドネシアネットワーク(JANN)の浦野真理子さんが代表をつとめる、「村落林」の登録に向けたプロジェクト(2010年度助成)です。

このプロジェクトは、油ヤシ栽培や炭鉱開発などによって森林が減少・劣化し、慣習的な森林利用の規制が失われつつある東カリマンタン州のロング・ブントク村とムカール・バル村で、地域の森林を「村落林」として登録することによって、村の住民が森林を主体的に管理し、利用できる体制の構築を目指すものです。

インドネシアはすべての森林が国有であり、政府が管理することになっていますが、地域住民が慣習的に使用してきた「慣習林」とよばれる森林は、国有ではあるものの、伝統的には村落が管理し、住民達は森林から多くの生活の糧を得てきました。しかしこの慣習林も、国益に合致すると政府が判断すれば、地元住民の同意を得ることなく、企業に利用権を与えることが多く、その結果、森林を

生活の糧としていた住民と国や企業の間で紛争が頻発していました。こうした背景のもとで生まれた「村落林制度」は、国有林を村落が35年間にわたって管理し、利用する権利を法的に認めるもので、2008年に施行されました。これにより住民の伝統的な生業である焼畑と狩猟も継続できます。

サマリタ市ではプロジェクトメンバーの藤原江美子さん

にお会いし、翌日からの2つの村の訪問について打ち合わせをしました。ちょうど雨季に入った頃で、3日目の朝も雨が降り、ロング・ブントク村に向かう道は滑りやすくなっていました。インドネシアの雨季は日本の梅雨とはちがいで、降ったり止んだりの繰り返しです。この日も途中で雨が上がり、太陽の光をたっぷり浴びて、森全体が緑に輝いていました。それとともに、炭鉱開発や油ヤシ農園の拡大などによって山が荒



初日の夜は村の人々と歓談



早朝、登校する村の学生たち

れている様子も目にしました。夜10時、藤原さん、現地NGOのスタッフとともに、10時間かけてやっとロング・ブントク村に着きました。

ロング・ブントク村の人口は1200人ほど。民族はダヤク・モダン人、ブギス人などです。小学校から高校までありますが、公共的に電気が使えるように

なつたのは今年に入ってからで、それも午後6時から11時までの5時間だけ。携帯電話が通じる場所は限られており、インターネットの環境も整っていません。

4日目の早朝、村を散策すると、みんな笑顔で挨拶を交わし、朝食を用意するなどの穏やかな暮らしを目にすることができました。前日の雨で山道がぬかるんでいたため、11時ごろまで待って、村落林の団体長ら5人ほどの住民とともに、村落林の登録を目指す山に行きました。彼らは、村落林制度を活用して今までの生活を維持したいと言っていました。この日の午後8時、役場に住民が集まり、村落林の登録に向けた取り組みに関する会議が行われました。

今からおよそ5年前、ロング・ブントク村は、企業による油ヤシ農園の開発を村全体のデモで阻止しました。このときから、自分たちの土地は自分たちで守るという意識が高まり、村落林の登録を実現するためのワークシヨップ（森林資源の調査、地図作成など）やスタディーツアー、ロビー活動が行われました。こうして2011年8月に4万4000haを村落林として申請したのですが、これを受けた県知事は、企業への操業許可が出ている土地を除く1万1000haのみを認可するよう林業省に推薦、さらにこの翌月には、林業省の調査によってその対象範囲は700haにまで縮小



村落林対象地への入口

されたのです。住民はこの決定に納得せず、1万1000haの登録に向けて、NGOの協力のもと、林業省への働きかけを行っています。このように、村落林の登録には政治、経済、隣村との境界問題などが複雑に絡んでおり、息の長い取り組みが必要と思われる。5日目は、ロング・ブントク村から3時間ほどボートに乗り、クニヤ・バクン民族が住む、人口700人ほどのムカール・バル村に着きました。ここには小学校し

【訪問先】
インドネシア共和国
中部ジャワ州

【助成題目】
アジア自然農業普及プロジェクト—
インド、インドネシアの現地NGO
および農民組織と連携した技術マ
ニュアル出版・普及と農民トレーナー
の育成



持続可能な農業のための「自然農業」の普及を

出張6日目は、朝から降り続く雨のなかをボートと車で10時間かけてサマリダ市に戻り、7日目の早朝、東カリマンタンを離れて、ジャカルタ経由でジョクジャカルタへ移動しました。

ここで行われているのは、ACC21（アジア・コミュニティセンタ―21）の広若剛さんが代表をつとめる、「アジア自然農業普及プロジェクト」（2009年度助成）です。このプロジェクトは、ACC21のコーディネーターのもとに、韓国の趙漢珪氏が考案した「自然農業」をインドネシアとインドで普及するため、講習会、現地語マニュアルの作成、中核となる人材育成などを行うものです。プロジェクトは2011年10月末に終了したばかりで、これまでの成果を楽しみに訪問しました。



インドネシア語に翻訳された、自然農業のマニュアル本

かないので、中学校に進学する場合は村を出なければなりません。そのため若者の減少が過疎化へつながり、深刻な問題になっていきます。2011年3月に村落林の説明会があり、住民の強い希望があつて取り組みをはじめましたが、村長の関心が低いことから、申請書類の作成に遅れが生じています。

この日の午後8時から村の集会場に50人ほどの住民が集まり、村落林の申請について話し合いました。県知事から紙バルブ材生産用植林の許可を得た企業が、村落林の領域を含めて開発しようとしていることが報告され、森林を守るためには村落林の登録が必要であることを再確認しました。参加した住民は、たとえ時間がかかっても最後まで取り組みたいと語っていました。

どちらの村においても、申請書類の作成、曖昧な審査基準、申請から認可までのプロセスの不透明性などが高いハードルになっているようです。今後、住民とJANNI、現地NGOがいかに協力し、登録をどこまで実現するか、見守っていききたいと思っています。

*1「村落林制度」

「村落林（インドネシア語 Hutan Desa）は、1999年に制定された第41号森林法ではじめて定義された。その後2008年に林業大臣規則第49号で具体的な政策がスタートした。

実際には、住民が登録を希望している地域がすでに企業による伐採権が認められている場合も多く、ロング・ブントク村のケースのように登録面積を大幅に削減されるケースも多い。



右が現地を案内してくれた日本インドネシアネットワーク（JANNI）の藤原江美子さん、左が JANNI 現地スタッフのエヴァさん、中央が筆者

自然農業は、農薬や化学肥料に依存せず、地域の資源や風土から得られる植物発酵エキス（主にヨモギとセリを利用）と土着微生物を活かして、自然の力を引き出す農法です。趙氏は、土作りは土着微生物の力を借りることから始めるべきだと主張しています。

広葉樹林や竹林から採取した土着微生物を培養して元種をつくり、堆肥やボカシ肥などに利用したり、液肥にして農作物に与えたり、さらには鶏や豚の餌としても



自然農法で作られた酵母や堆肥

活用します。その地域に昔から棲息している多様な土壌微生物は、たがいにバランスを保って生きてきたので、その地域に最も親和性があり、力強いのだそうです。この日はプロジェクトメンバーのリーさん（NGO Beas Dess スタッフ）に会い、翌日のスケジュール確認を含む簡単な打ち合せをしました。

8日目、リーさんとともに、ジョクジャカルタから車で4時間ほどの中部ジャワ州バンジャルネガラ県に行きました。最初に訪問したのは、2005年から自然農業を続けているというバインナさんの畑です。最初はお米だけを自然農法で栽培したそうですが、現在は野菜、果物、山羊飼育などにも幅広く応用しており、村のリーダー的な存在として信頼されているようです。まわりの畑がかなり乾燥していたのに対して、バインナさんの畑は水分を保っています。リーさんによると、化学肥料や農薬を使用すると土地が酸性化して固くなり、持続可能な農業が難しくなるのに対して、自然農業は土着微生物の活用や不耕起栽培によって土壌環境が改善されるので、自然にも優しい農法だそうです。また、肥料や農薬を購入しないので、コスト削減のメリットもあると説明してくれました。バインナさんのご自宅では、土着微生物を利用して作ったという酵母や玄米酢を見せていただきました。



in village forest



MAN 中学校の生徒たちと。オレンジ色のTシャツを着ているのが NGO Bina Desa スタッフのリリーさん。右隣に立っているのがコーリック先生

自然農業に取り組んでいるのは農家だけではありませんでした。なんと地元の中学校でも自然農業をしていると聞いて、MAN (Madrasah Aliyah Negeri - state moslem senior high school) 中学校を訪問しました。ここでは生徒50人ほどでサークルを結成し、自然農業に関する実験と実践を行っています。2009年には、自然農法によって家畜の飼育を減らす実験に成功し、インドネシアの科学オリンピックに出たそうです。サークルを指導しているのは化学のコーリック先生。彼は大学院の修士課程で自然農業を研究し、修了されています。生徒たちは、学校で学んだ自然農業の知識を彼らの親に伝えていきます。これは一種の知識や技術の普及活動ともいえ、私にとっては新たな発見でした。

コーリック先生が設けてくれた面談の場で、生徒たちは「農業に対するモチベーションが下がっている」と率直に話し、これに対してリリーさんが、「自分の故郷を大事にすべきであり、それがインドネシアの未来につながるのだから、もっと誇りをもって農業に取り組んでほしい」と語りかける場面もありました。まだ中学生の彼らに故郷を守ることの重要性を語っても、すぐには受け入れられないかもしれませんが、いずれはこの日のことを思い出し、理解するだろうと信じています。

私たちは次に、「インドネシアの趙先生」とよばれているスバルノさんの自宅にうかがいました。趙氏の教えに従って、インドネシアで初めて自然農業を実践した人です。応接室は研究室のような雰囲気です。いつでも会議ができるように白いボードがセットされており、隣の部屋では何種類もの土着微生物が培養されています。スバルノさんはここで、山羊を自然農業によるえさで育て、その糞で魚を飼育し、両方の成長を促進させる組み合わせ飼育を考案しました。スバルノさんは趙氏の教えを受けた第一世代であり、バインナさんは第二世代だそうです。

訪問に同行してくれたリリーさんは、趙氏の自然農業に関する英

語のマニュアル本を、この国の実情に合わせてインドネシア語に翻訳しました。図解をたくさん使ったわかりやすい内容で大変評判がよく、印刷した1000部はほとんど配布したそうです。リリーさんに「自然農業で大事なことは何ですか」と聞くと、「考え方の転換です」という答えが返ってきました。自然農業においては、コストダウンと収穫量の増加による経済的利益の増大より、持続可能な農業のため、土地が健康な状態を維持することが大事なのだそうです。自然農業は、スラウェシ、アチエ、西スマトラ、中部・西・東ジャワなどの地域に普及しており、リリーさんは、プロジェクト終了後もフォローアップと普及活動をしていきたいと言っていました。

「村落林の登録」、「自然農業の普及」と課題は異なりますが、どちらも、人間がいかに自然との共生をはかっていたか、その模索であるように思えます。それには、リリーさんの言っていた「考え方の転換」という言葉にヒントがありそうです。

藤原さんとリリーさんから何度も聞いたインドネシア語に、「Gotong Royong」という言葉があります。相互扶助、つまり、民族や宗教がちがってもお互いに助け合うという意味です。たくさん隣の隣人——地域や国を超えた広い意味での隣人の協力によって、それぞれのプロジェクトに真剣に取り組んでいる姿に頭が下がりました。どちらも息の長いプロジェクトですが、目標が達成されることを期待しています。最後に、ハードスケジュールに付き合ってくださった現地のみなさんに、心よりお礼を申し上げます。

*2「自然農業」

環境保全型の農業の一種。趙漢珪氏、韓国自然農業協会が普及。その特徴は、①土着微生物をはじめ、現地資材を最大限利用すること、②有畜複合経営であること、③小規模農家でも適用可能であることという3点にあり、現在アジアの各地で多くの農家が実践している。(ACC21ウェブ・サイト [http://acc21.org/チリ])



*地図上の数字は移動順序を示す

JOINT
ホット・インタビュー

グレッグ・ドボルザーク

●聞き手：大澤香織(トヨタ財団アシスタントプログラムオフィサー)

現在、一橋大学准教授として教鞭をとるグレッグ・ドボルザークさんは、米軍関係者だった父親の仕事のため幼少期に両親と弟と共にマーシャル諸島クワジエリン（クエゼリン）環礁に暮らし、その後、米国へ帰国。高校時代には長年、興味を抱き続けた日本へ念願の留学を果たす。まだ30代の若手研究者だが、ミクロネシアと日本の島々をつなぐプロジェクトをライフワークと言い切るドボルザークさんにその思いを聞いた。

日本列島とミクロネシアを 研究と芸術でつなぐ 架け橋として

——学問研究としてはどのような流れを汲むのでしょうか。

プロジェクトの背景には、「太平洋諸島学 (Pacific Islands Studies)」というハワイやニュージーランド、フィジーなどで発展してきた学問領域があります。若手以外にはまだまだあまり知られていないこの分野を日本で広めることも私たちの目的のひとつです。よく行われている学問の枠組みでは、研究者である日本人が現地を訪問、観察し、日本人の視点で記述するという手法がとられています。もちろん、それ自体には何の問題もないのですが、それと太平洋諸島学の手法を対比すると、よいかも知れません。現在の太平洋諸島学は、島の人人々の自己表現として大切な芸術を重視し、彼らの視点を通じて物事を考える学問です。今回のプロジェクトの共同研究者も、世界各地の研究者から現地のアーティストまでと実に多彩で、太平洋諸島学を進めてゆくの

にふざわしい顔ぶれが揃っています。

実は、太平洋の島々をミクロネシア、ポリネシア、メラネシアという名前で区分けすることは人類学的な意味はあるのですが、実際には外からやって来たヨーロッパ人が恣意的につけた何の意味もない呼称とも言えます。ミクロネシアとは「小さな島々」という意味で、19世紀にデューモン・デュルビルというフランス人が名付けたのですが、島の人人ちにとってみればヨーロッパの人たちがそう呼ぶから自分たちはミクロネシアンなのだ、と思っっているにすぎません。ただ、まとめて植民地にされたというアイデンティティ、つまりコロナリアル・ヒストリーは島々に共通しています。

——それが「トランスオセアニア」という研究
題目の意味なのですね。

オセアニア、というと日本では主にオーストラリアやニュージーランドのイメージに

グレッグ・ドボルザーク Greg Dvorak
(2010年度 研究助成プログラム助成)

【題目】トランスオセアニア——日本列島とミクロネシア間の戦争・帝国・グローバル化に関する太平洋アプローチ

【助成期間】2010.11～2012.10

【助成概要】本プロジェクトは、歴史学・エスノグラフィ調査、コミュニティ主導の草の根交流、芸術を通じたアドボカシーを総合的に組み合わせた学際的研究により、日本の小さな島々とミクロネシアの旧日本植民地の間の結びつきを、歴史、文化、環境持続性の観点から検証し、強化するものである。その背景には、広がりを見せている太平洋諸島研究、すなわち、学問と芸術が連携して大きな変化をもたらす学際的手法の存在がある。

研究面では、これは日本の小さな島々とミクロネシアの間の過去と現代の文化的な結びつきに関する調査である。そのなかには、米国と日本、さらに太平洋戦争についての島民の記憶の調査が含まれる。本プロジェクトでは、ミクロネシアと日本の小さな島々の住民が集うコミュニティ間の交流の場を設け、史上初の対話を実現する。また、芸術家に依頼して島民と共に創作活動を行い、ミクロネシアとの文化と歴史の関係や、気候変動とグローバル化によってこれらの島々が直面している深刻な問題について、日本での認知度を高められるような作品を制作する。研究と芸術と実践活動を通じた本当の社会貢献を融合する本プロジェクトの最終目的は、太平洋のハブとしての日本の役割を高めることにある。また、日本列島の豊かな遺産を保存し、小さな島々の活力をはるか未来へと継承していくための長期プログラムの策定も目的としている。

——日本列島とミクロネシアの島々のつながりにご関心があるとのことですが、どのようなプロジェクトなのでしょう。

通称ミクロネシアと呼ばれる地域はマーシャル諸島、ミクロネシア連邦、パラオ、サイパン、グアムなどを含みます。最近では気候変動による海面上昇の影響などでも知られるようになりました。ミクロネシアと日本列島の島々の関係を見つめ、草の根からの人と人のネットワークを築いていこうというのが、このプロジェクトの趣旨です。ちゃんとした学術研究であると同時に、芸術家を研究メンバーとして、将来的にはNPOを立ち上げ、島との交流を促進する活動にもつなげていきたいと考えています。

ミクロネシアの島々は、現代日本人にとってはビーチやスキューバダイビングに象徴されるように、一種の「楽園」である一方、戦争と帝国主義を経験した高齢者にとってはタブーとして忘却された地域です。一方、ほとんどのミクロネシアの島のほうでは南洋群島として三十年間も日本が統治し、圧倒的な数の日本人が暮らした時代が続いたので、今、今の若い人のなかにも日本の歌や言葉覚えていてる人がいます。台湾などでもそうでしたところがありますね。日本人自身もずっと日本とのつながりを意識し、一般の人々から政府の役人まで、もつと日本との関係を持ちたいと考えているのです。私が特にミクロネシアに注目しているのは、やはりそこに日本の歴史が積もっているからです。

なつてしましますが、実はそれらの国だけではなく太平洋の多くの島々が含まれます。トング出身の有名な太平洋諸島学者として活躍していたエベリ・ハウオファ先生が「島を大切に思い、島に属する気持ちを持つならば、あなたは『オセアニアン』である。島と島のつながりを意識すれば、海そのものが私たちのアイデンティティである」と言っていました。そうした意味を込めて私はこのプロジェクトを「トランスオセアニア」と名付けました。太平洋の人人々をリスペクトしながら、「太平洋の島としての日本」を大切にしたいのです。

海のネットワークで海流に乗り、サンゴの根のようにつながってゆく島々というイメージから、私たちのグループではこのプロジェクトを別名「プロジェクト35（サンゴ）」と呼んでいます。文化もサンゴのように、国境を越えてさまざまな人を繋ぎますし、サンゴの微生物と同じように、人間が一緒に協力し合えばとても大きな「しま」みたいにきちんとした新しいコミュニティができるのです。私が幼い頃、暮らしていたマーシャル諸島クワジエリン環礁は、世界最大級のサンゴの環礁でもあります。

——方法として「芸術」を重視するということですが、太平洋諸島学はどのように芸術を学問の中に取り入れているのでしょうか。

その点、非常に重要なポイントながら、実はまだ実験段階なのです。1990年代にカルチュラル・スタディーズという学問分野が国際的に拡がった時、太平洋諸島学でもつ

とポストコロニアルなアプローチと、島の人らしい手法を考えようという機運が高まりました。たとえば2012年に、東京でシンポジウムを開催する時にもぜひ引きたいと考えているテレシア・テイワ氏は「太平洋諸島の学者は、アーティストでなければならぬ」と提唱しています。現地の芸術を見て、読み解いてゆくことにより、人類学的な語り方を避け、より現地の人の表現に近づけるのではないかと考えたのです。言語化しないものも学問に取り入れていく試みとも言えるでしょう。

現地の芸術がどういうものかと言うと、伝統的なアプローチを取り入れながら、現代の社会問題を批判的に表現している人がいます。たとえば、パラオでは伝統的にかなり重要な「バイ」という聖なる集会用の建物があるのですが、パラオ特有のデザインで装飾されています。ヨーロッパ人が島に来た時の様子や、パラオの神様などの他、最近のアーティ



日本委任統治領時代を描くパラオの板彫

ストはこのバイをもとに、日本占領時代の日の丸や戦争の様子などをモチーフにして多くの島の歴史を彫り物(板彫)で表現しています。サム・アデルバイというアーティストの「20世紀のバイ」の油絵や版画には、プシの瓶や飛行機、

核実験の絵などちよつとポップで不思議なモチーフがふんだんに取り入れられています。もちろん、土産物としてそこに売っているようなものではなく、現地をいろいろ歩き回って探しました。他にも刺青や、海図を表した工芸品などさまざまな芸術があります。

ここで言う芸術とは、何らかのメッセージを持ったアプローチ方法のひとつということ。今回、現地調査でお会いしてきたパラオの文化大臣も、ぜひ、こうした島の芸術を復興し、ギャラリーなどを開きたいと、私たちと意気投合しています。

——ドボルザークさんがこうした研究に足を踏み入れたきっかけについて教えてください。

1970年代の冷戦時代、核実験の中心地がマーシャル諸島のクワジエリン環礁でしたが、私は両親と弟と10歳までそこに暮らしましたが、広くて美しい島に米国人ばかりが住んでいるというのは、幼心にも違和感がありました。

家のお手伝いさんとして交流のあった現地のマーシャル人は当時まだ40代でしたが、日本語を話すことができ、島には多くの日本の戦跡もありました。同時に私はマーシャル人の踊りや、歌、ボエボエナードと呼ばれる物語に触れて育ちました。ボエボエナードというのは、彼らの生きた神話で、今も現地の高齢者にお話しすれば延々と3日間でもぶつとおして話を続けてくれます。そこには何世代にもわたる家系の話とともに海や地形、環境の変化、歴史など色々な島の知見が積もっていて、聞いているうちにヨーロッパ人や日本

るのです。

パラオでは、かつて巨大な南洋神社が建設され、今もその跡が残っています。当時は出雲、伊勢に並ぶ、国家神道の神社でした。そうした現地の細々としたことが、現在では少し政治的に偏った日本人が大挙して島を訪れるというような現象を生んでいるのはちよつと怖いところです。島の人と関係をつくるよりも、とにかく効率よく短期間で情報だけ集めて帰ろうとする日本人もいます。そうした人たちとはまた少し距離を置きながらも、たとえ時間がかかっても、私たちはしつかりと島の人たちと関係をつくっていきたくて考えています。

——今後、日本人は太平洋の島々の人々とのような関係を築いていけるでしょうか。

自分で言うのもどうかと思うのですが、実は大学で私の講義やゼミは平成生まれの学生たちにとっても人気があります。南の島への憧

人、私自身(!)のことが出てきて、ああ、これは実話なのだ気がつくのです。

実は、太平洋の島々にはどの地域でもそのような語りがあり、文化、というところですが、そうした彼らの考え方、理論、哲学を大切にしたいと思つてその後、ハワイ大学で太平洋諸島の修士号を取り、またオーストラリア国立大学で書いた博士論文ではマーシャル諸島の人々の視点から見た日本やアメリカ、戦争の歴史を書きました。

とは言つても、研究対象として考え始めたのは実は後からのことで、その前からずっと直観的に深い絆を感じていました。私はマーシャル人たちから日本人についての話を聞き、日本人はどういう人たちなのか、とまだ見ぬ日本への憧れを感じていました。高校時代に日本の宮崎に留学し、日本語ができるようになると、実際にどんどん日本員になつていったりしました。

その後、また一年ほど宮崎に国際交流員として働きに行く機会があり、2000年の九州沖縄サミット事務局で広報を務めました。そこで、来年2012年にも開催が予定されている「日本太平洋島サミット」が開かれ、マーシャル諸島の大統領が来日し、私が通訳などもすることになりました。ずっと島には帰っていないかつたし、大統領にマーシャル諸島に帰つてこい、などと言われ、何か運命のようなものを感じました。実は宮崎県の中でも私のいたところはマグロの遠洋漁業の基地があるマーシャル諸島マジュロまで頻繁に漁船が出ているような地域で、やはり島とつな

れや、観光、環境、核などのテーマからでしょうか、若い人は不思議なくらい興味を持っています

日本とこんなに近いのに、今のグローバル時代に何も島のことを知らない、というのはやはりおかしいでしょう。日本列島は7000くらいの島々からなる群島で、まぎれもなく太平洋の島なのです。今年3月の津波で、日本は大きな打撃を受けました。それは勿論、悲劇的なことだったけれども、太平洋の島々はしばしば津波も台風も経験してきました。マーシャル諸島で核実験が行われ、莫大な量の放射線を浴びてきたのに島の人たちは生き延びてきました。サバイバーとしての彼らから改めて今、日本の人たちが学べることも多いのではないのでしょうか。

「日本は島国だ」と言うと、一般的には鎖国のような閉鎖的イメージで、孤立している意味に使われるのですが、実は近所の島々と同じ海、同じ波でつながっているのです。

今回、太平洋の島々と日本は巨大な津波でつながってしまいました。マーシャル諸島は、国連や世界銀行の基準で考えれば大変貧しいところですが、そんな彼らが日本のため一日で100万円もの募金を集め、東北に送りました。子どもたちも自分のサイフからコインを出して募金をしていたぐらいです。同じ島の人として、彼らはそういう意識を持っています。アジアの一部としての日本だけではなく、サンゴの根でつながる島としての日本を大切に、交流を深めていければと願っています。

がつていたのです。これが運命でなければ何なのか、と。

何かしなければと思つていたのですが、その時にはまだ何をすればよいか分かりませんでした。そこでまずは大学院に入らなければと思い、ハワイ大学に入学しました。自分のルーツも考えながら、太平洋諸島学を学んでいたのです。でも、実はそういう経験をしている人は意外とたくさんいるのです。今は米国人としてではなく、日本人としても、マーシャル人としてでもなく、オセアニアンとしてがんばっています。プロジェクトの共同研究者も、皆そういう人たちです。

——実際の現地調査はいかがでしたか。

これまで沖縄や奄美、高知など黒潮でつながる日本の島や沿岸の他、アーティストらとともにパラオ、サイパン、マーシャル諸島、チュウクなどを訪れ、主に現地の高齢者と話をしてきました。

マーシャル諸島で出会った現地の男性チュージ・チュウタロウさんは、もともと沖縄から来た「グシチュウタロウ(具志忠太郎)」という人の息子でした。「グシチュウタロウ」という人は「グシ」が姓だったはずなのですが、それが姓なのか、名前なのかさえないからに、彼ら一族は今「チュウタロウ」を姓として名乗っています。その一族のひとりチュージさんは、マーシャル語と日本語混じりの英語で彼の小さい頃の戦前・戦時中の体験について話してくれました。島の人には個人の記憶の深い層に、日本に対する複雑な想いや懐かしさ(ノスタルジア)が眠つてい



クワジェリン環礁で遊ぶマーシャルの子どもたち

イ スラームにおける祈りという点、モスクに集まり、一斉にメッカに向かって礼拝する姿を思い浮かべるだろう。しかし、イランで暮らしてみると、そうしたイスラームとは異なる信心の形が見えてくる。人々は、町や村の一角に設けられた聖なる人々の墓廟や水汲み場で、人里離れた沙漠や山の中に作られた廟や岩窟で、あるいは巨木や泉の傍らで、祈り、ろうそくを灯し、ひもや布きれを結びつけ、時には泊まり込んで願掛けを行う。「聖所」とは、そこを訪れ、祈る人に何らかの癒し（シャファア）を与えてくれるとされる場所である。人や家畜の病氣平癒や子授けから雨乞いまで、願いの内容はさまざまである。日常生活の一部として、シャファアを分けてもらいに訪れる人も見られる。

聖所の多くは、シーア派のイマームたちの子孫の墓とされているが、そう言われているだけで確認できないものが多数である。これら聖所に中央政府やイスラームの権威は必要なく、地域の人々が聖所であると認めているかどうか重要であった。シャファアを多く得られると評判になれば自然と参詣の人が集まり、集まってきた人々からの寄付により繁栄を見せ、シャファアが失われたと見なされれば寂れ、いつしか跡形もなくなってしまふ。

一九七九年のイラン・イスラーム革命以後、イラン政府は、学校教育やマスコミを最大限に利用して、イスラームの理念の普及を行ってきた。就学率を向上させ、文盲撲滅運動を展開し、識字率や大学進学率が飛躍的に向上した。

そのため、イスラームと関係があるとは言いにくい自然物に対する信仰は急速に姿を消しつつある。イスラームに関連した人物の墓（廟）であるという文献上の証拠がないと本物ではない、というプレッシャーを感じる人たちが、調査に訪れた私に廟が本物かどうか調べることはできないかと尋ねることもしばしばである。

そ うした不安を大げさではないかとも思っていたのだが、二〇一〇年、ギーラーン州のある村の聖所を訪れると、そこには本来あったはずの墓廟はなく、瓦礫が小山を成していた。村の人に事情を尋ねると、役人がやって来て「聖所ではないし、違法建築だ」と言って、廟を破壊していったという。また別な村では、たまたま居合わせただけの、私の調査とは無関係な政府関連機関の職員が「こんなもの（墓廟）は何の意味もない。すぐにも壊してやる」と言い放ち、案内してくれた村の若者を不安に陥れていた。

強力な中央集権体制が敷かれ、ありとあらゆるものが中央の許可を得なくてはならないという体制においては、墓廟の修理や整備を行うにも管轄の事務所から許可を取り、資金を得なくてはならない。しかし、そのためには「正統な聖所」と認められ、中央に登録された聖所なくては難しい。そのため、修理もままならず朽ち、人がほとんど訪れなくなった墓廟も増えている。湿潤な気候のギーラーンでは、こまめに手入れをしなければあつという間に建物は崩れ落ちてしまふ。自分たちの信心する聖所を、他の町の廟の

私のまなざし ②

イラン地域社会における聖所信仰
～多様なあり方とその変容

文・写真◎清水直美
2009年度研究助成プログラム助成対象



ギーラーン州シャフト市の駐車場の一角にイスラームの法官の墓が置かれ、人々が祈りを捧げる聖所となっている。以前、ここは墓地だったが市域の拡大に伴い、この墓を残して商店が建ち並ぶ地区となったという



ギーラーン州ラーヒージャーン郡にある、泉とその傍らの巨木。泉の水はさまざまな病氣に効くとされ、訪れる人々は容器に水を汲んでいく。その傍らの木には祈りを捧げながら結ばれた緑の布がびっしりと下がっている



同郡の当局により破壊された聖廟。地域の人々は再建を望んでいるが、当局の目を気にして瓦礫の撤去も行われていない



同郡の建築途中の聖廟。資金不足から工事が止まっているとのこと。寄付を呼びかけているが思うようには集まらないとのこと

しかしそれと同時に、地域社会に根ざしていた聖所に対し、「真の信仰に反する」「願掛けなど時代遅れ」「まったく科学的ではない」と否定する人が増えた。実際、聞き取り調査を行っている時、時に、聖所を管理・運営する立場にある人物たちですら、聖所の奇跡譚を「嘘ばかりだ。科学的じゃないだろう？ あんたもそんな話を信じるんじゃない」と否定する。奇跡譚を否定したら聖所としての価値はなくなってしまうのではないかと、こちらが心配してしまふほどである。

聖所とは、中央政権とは関係なく、地域の人々の手によって維持されてきたものである。しかし、それに対して政府関連機関は、「正統な聖所」と自分たちが認定したものを外を破壊するという政策を打ち出している。

ように、タイル張りや金色のドームを持つ立派なものにしたいとは思っても、住民の多くが生活保護を受け、都市部との経済格差にあえぐ農村では、建築費用を自分たちで賄うこともままならない。信心を失い、資金集めに消極的な地域住民も増えている。無理をして関連機関からの借入金で立派な廟を建てたものの、思うように参詣者からの寄付が集まらない聖所も見られる。

カ スピ海と峻険な山脈に囲まれ、イランの他地域には見られない湿潤な気候を持つことから、独自性の強い文化を育んできたギーラーン州で二〇〇九年から二年間、研究助成対象事業として聖所の実態調査を行ってきた。残念ながら目標としていた全域の調査を終えることはできなかったが、調査を行うことのできた地域を見ただけでも、廟は新しく、美しくなっている、伝統的な参詣行為や、豊かな自然と結びついた地域性とも関連した行事、聖所にまつわる言い伝え等が廃れ、忘れられつつあることは見て取れた。

ギーラーンの聖所が、このまま他地域と変わらない画一化されたものとなり、数を減らしていつてしまふのかはなほだ心許ない。記録されることもないまま忘れられていくのかもしれない聖所の今を、記録に残す。それが今後の地域研究に、また、人々が自身の文化を振り返る際に役立てばと願う次第である。

●しみず・なおみ(テヘラン大学外国語学部講師)
2009年度研究助成「イラン・カスピ海沿岸地方の聖所信仰と地域社会——その現状調査と基本情報のデータベース化」助成対象

トヨタ財団では、本誌7号(2011年8月発行)でもお伝えしたように、3月11日の東日本大震災の発生直後から、今回の震災が長期的な支援の必要な大規模災害になると考え、財団としてどのような取り組みをすべきかについて検討を始めました。

阪神・淡路大震災の際にも、復興のプロセスが長期間にわたった一方で、復旧が一段落するともにもさまざま支援が細くなつていきました。今回の震災は、それ以上の規模であるため、長期にわたって多様なニーズが生じてくることが予想されることから、柔軟な対応のできる民間財団としての特性やこれまでの助成活動の経験を活かす、緊急支援ではなく、中長期的な地域コミュニティの復興に力を注いでいくことを方針として決めました。

はじめにイニシアティブプログラムという助成枠組みのもと、地



東日本大震災に関する取り組み
イニシアティブプログラムからの報告

「人材支援」が復興の鍵

域コミュニティの復興の鍵となる「人材支援」についての助成を進めていくこととしました。具体的には、①ボランティア・コーディネーターに関わる支援、②地域コミュニティの再生に関わる人材支援、③次世代育成に関わる人材支援を3つの柱としています。イニシアティブプログラムは、公募による助成とは異なり、財団が主体となつて現場のニーズに即したプロジェクトを計画的に助成するものです。

6月以降、担当のプログラムオフィサーたちは、岩手・宮城・福島県の3県を中心に被災地をまわり、当該地域の人の話を聞きながら、何が必要とされているのか、財団に何ができるのかを考えました。今回は主に福島と岩手を訪れたプログラムオフィサー2名(青尾・若松)が、それぞれに現地で見聞きし、感じたことを助成プロジェクトの紹介とあわせてご報告します。



福島県

痛みを寄り添い、心を支える

●青尾謙(トヨタ財団アシスタントプログラムオフィサー)

福 島県内のいわき・相馬・南相馬・福島・郡山・会津若松と歩きながら、「東北は外部の人間が入って、何かできるところじゃない」という、東京で聞いた言葉が、いつも頭のどこかで

聞こえていたように思えます。そんな思いを抱きながらも、それぞれの場所でも多くの方々にお目にかかり、お話を聞いてきました。

東北では東京などの大都市圏と比べ、自治会な

どの地縁組織が強固な一方で、NPOなどの団体は決して多くありません。福島は震災後、外部からの支援も他県に比べれば少なく、その中で地元の人が周りを助けようと、懸命に動いていました。いわき市では、地元の若者が外部のボランティアとともに、津波で破壊された家々の片付けを行っていました。福島大学の学生は、自分の就職活動を忘れて、被災者の受け入れや、子どもたちの学習支援に取り組んできました。郡山市で、避難者に炊き出しを行ってきたNPOの代表は、別れぎわにこう言いました。「私じゃなくていいです。誰かを支援してください。本当に大変なんです」

助 成方針として、第一に考えたのは、地元の人たちを中心に考えなくてはということでした。その結果が、(特活)^{*}日本ボランティアコーディネーター協会が福島県社会福祉協議会と一緒に、生活支援相談員に対する研修への助成でした。

生活支援相談員は土地の人から選ばれ、仮設住宅入居者のニーズを聞き取り、行政につなぐ大事な役割を果たします。とはいえ、震災前に同じような仕事をしてきた人たちは限られており、被災した人たちの間でのコミュニティづくりや、内外のボランティアを活用する方法等について、十分なトレーニングが行われる必要があります。今回の助成は、それを支援するものです。今後数年間にわたって、被災した方々を支え、新たな地域のつながりをつくっていく中心となる人たちへの支援が、まず始まりました。

福 島は、津波や地震による被害に加えて、原発事故による被害にも苦しんできました。

そのなかには、現実の被害にもまして、恐怖や偏見によるものも多く、福島市郊外では、美しく色づいたさくらんぼが、木になったままの光景が広がっていました。地元の人々の話を聞いていて、逆に「あなたは福島に何度も来て平気なんでしょうか? この水を飲むことができますか?」と問いつめられたこともあり、そこにどまつている人の不安と恐れを感じずにはいられませんでした。

その痛みを直接に受けていたのが、子どもたちでした。会津若松市にある仮設住宅では、過激なほどの元気をぶつけてくる子どもたちに驚きました。そこにいらしたお祖母さまに「子どもたちは元気ですね」というと、お祖母さまは「今はだいぶよくなりましたが、しばらく前まで元気がなくて。今新しい学校に行ってるんですが、お友だちもいないので大変みたいで。こつち(仮設)に戻って、ボランティアさんと遊んでるときだけが元気なんです」とおっしゃいました。子どもたちにとって慣れない環境で、外部から来たボランティアがその子たちの支えになっているのは間違いありません。でもそれが途絶えたときに子どもたちはどうなってしまうのか? そのことを考えずにはいられませんでした。

そ んなとき、福島市や郡山市で子どもや若者支援の活動を続けてきたNPO「ビーンズ^{*}ふくしま」と出会いました。専門性やマネジメント力を持ちながら、被災者支援を行うための人手がない、とおっしゃるのを聞き、子ども支援の活動を続けてきた福島大学の教員・学生ボランティアの存在が頭に浮かびました。そこから生まれたのが、ビーンズふくしまとボランティアが協働し



福島県二本松市、JVCA生活支援相談員研修の様子

「概要」福島県では、県と市町村の社会福祉協議会が協力し、仮設住宅を中心に避難住民を支えるためのキーパーソンとしての「生活支援相談員」を配置する計画を進めている。この中で、この動きに呼応して、培ってきたノウハウやネットワークを活かしたトレーニングの実施などを行う。

*2 ビーンズふくしま

「代表者」若月 ちよ
「助成題目」被災地仮設住宅等における「遊び」・「学習」などを通して、生活に根差したなかでの子どもを軸にしたコミュニティ形成支援
「概要」郡山市を中心に不登校児のためのフリースクール運営や、若者の就業支援を行ってきたビーンズふくしまと、県内大学のボランティア・グループが連携して、中通り地方の子ども支援を行い、地域でのつながりの回復と、コミュニティづくりを行う。



仮設住宅でボランティアとともに勉強する子ども

て、県中通りの被災した子どもたちの支援を行うプロジェクトでした。

このプロジェクトでは、仮設住宅や一時借上住宅の子どもたちの学習支援や、遊びや活動による子どものグループづくりを通じ、子どもたちを中心とした住民のコミュニティづくりを行おうとするものです。

このプロジェクトも、ひよつとするとより大きな問題から目をそらした、対症療法に過ぎないの

かもしれません。でも、この子どもたちが大きくなったときに、せめて「仮設にいたときは大変だったけど、あのお兄ちゃんお姉ちゃんたちと遊んだときは楽しかったな」と思ってもらえることを願っています。「みんな一度は来たけど、すぐに忘れられた」と決して思わせないように。そのための小さなお手伝いを行うことができ、よかったです感じながらも、状況が変わっていく中で「次は何をしないといけないか」とも思っています。



岩手県

地域に根ざした生業が創る復興への希望

●若松 明子(トヨタ財団アシスタントプログラムオフィサー)

東 日本大震災で大きな被害を受けた岩手県沿岸部を最初に訪れたのは、6月初め、仮設住宅の建設が各地で本格的に始まっていました。陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町と、被災した三陸沿岸地域を訪ねるなかで、人々をまとめる多くのリーダーと出会いました。

岩手県沿岸の一部地域は、震災後一時外部から孤立しました。役所が甚大な被害を受け、公的な機能がほぼ失われた自治体もあつたなか、地域の中から皆をまとめる人が自然と出てきて、役割分担をし、助け合う取り組みがあちこちで生まれた

と聞きました。

水 産業の盛んな地域で起きた今回の震災で多くの市町村と同様に、岩手県沿岸部でも震災前から高齢化が進んでいました。報道などでは、多くの人が地域を離れ、人口減少が進んだとも聞きますが、現在被災した地域で暮らす方の中には、絶対にその地域を復興させるといふ強い思いを持った方がたくさんいます。

被害を受けた地域を歩き、お話をうかがうなかで、必要とされているのは、地域に残ると決めた

住民の方や、その地域の未来を担う子どもたちへ、そこで生業をたて、生活を送っていきけるという選択肢を残すことだと感じました。震災後に内陸部や他県へ引越した人たちの中には、本当であれば地域を離れたくなかった人たちが大勢います。その方たちが早く故郷に戻ることができるようにするためにも、地域に根ざした生業の復活と創出が求められています。

イ ニシアティブプログラムでの助成が決まった、「NPO法人吉里吉里国」代表の芳賀さんは、震災後、様々な理由で他の避難所に留まられなかった住民を、自分たちの避難所に積極的に受け入れるなど、助け合いの仕組みを積極的につくってきた、「繋がる力」がずば抜けて強いリーダーです。本プロジェクトは、震災後に瓦礫の中から木材を集め、避難所の風呂用の薪として使っ

たのが始まりでした。震災直後から支援に入っていた「NPO法人土佐の森・救済隊」から専門的な指導を受けながら、避難所の住民を活動に巻き込み、多くのボランティアや見学者も受け入れてきたことで、一地域だけでは得ることができなかった活動の広がりが出てきています。

また、地域の山も海と同じように守り育てる本取り組みは、大槌町だけでなく、海から山までの距離が近い、三陸地域全体の生業づくりとなり得ます。たとえ今すぐ海へ戻ることが難しかったとしても、数年先、数十年先を見据えて、豊かな海とともに、もうひとつの宝である森も、地域に根差した生業を生み出す場として守り育てることが、地域住民の皆さんの、復興に向けた希望に繋がって欲しいと思いました。



馬による間伐材の搬送の様子(右)。間伐作業終了後の記念撮影(左)。間伐材は「復活の薪 第二章」として販売していく予定(第一章は木質瓦礫を利用)

***3 吉里吉里国**
【代表者】芳賀正彦
【助成題目】三陸地域の山と海を守り育てる
【概要】このプロジェクトでは、故郷に残る選択肢を住民に、さらに次世代に残すため、地域に根差した新たな生業を創出する。海と山が近く、漁業・林業の兼業が可能な三陸地域共通の地形を活かし、バイオマス利用(薪)と、誰でも参入できる小規模自伐林業(漁家林家)を復活させ、吉里吉里地区がモデルとなり、「古くて新しい林業スタイル」の三陸地域全体への波及を目指す。

復興に向けたトヨタ財団の助成プログラムについて

地域の方々の智恵や試みを支援していくために

トヨタ財団では、今回ご紹介した3つのプロジェクトを含めた、ニシアティブプログラムによる助成のほかに、公募プログラムである「地域社会プログラム」の中に【特定課題】を設け、被災者の生活再建、地域コミュニティの再生に向けた取り組みを支援する助成を行います。

本プログラムでは、長期的な暮らしの再建のためには、土地が古くから引き継いできた歴史や文化、震災の経験を継ぎ、地域内外の人びととつながりながら、新たな取り組みをつくりだしていくことが必要ではないかという考えのもと「継ぐ、つくる、つながる——共に拓く地域の未来」というテーマを設定し、被災地ならびに被災された方が

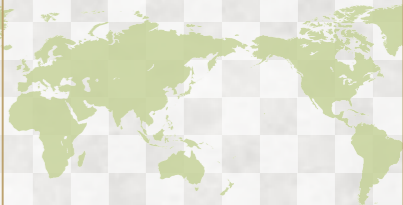
現在避難している地域からの応募を募りました。【特定課題】は11月30日(水)に募集を締め切り、233件の応募がありました。これから選考を経て、2012年4月から助成を開始する予定です。

また、来年度も継続して被災地域を支援するプログラムを設けることを検討中です。

時々刻々と変わる被災地の状況やニーズをどのように受けとめて助成につなげていくのか、いまだ模索の中にありますが、これからも地域の方々に寄り添い、その智恵や試みを支援していくために、努力していきたいと思えます。



ボードゲームで遊ぶ子どもたち



INFORMATION

●プログラムの応募状況 —地域社会プログラム

2 011年度地域社会プログラムは、「地域の未来」をテーマに公募を実施しました。また、同プログラムでは東日本大震災の発生に伴い、被災者の生活再建および被災地のコミュニティ再生に向けた取り組みの支援を目的とした「特定課題」を開設しました。

地域社会プログラム(本体)は、10月7日(金)~11月7日(月)まで公募を実施、応募件数364件、「特定課題」は10月7日(金)~11月30日(水)まで公募を実施、応募件数233件(12月1日現在)となっています。

TOPICS

●財団受付の節電対策 八丈島とトヨタ財団をつなぐ 風のエネルギー

3 月11日の震災以降、トヨタ財団では節電対策の一環として、事務所の電気を一部消灯して業務を行ってきました。事務所スペースは約34%を消灯、受付は100%消灯し、現在もいくつかの節電対策を継続しています。

トヨタ財団へお越しになった際、明かりの消えた受付の様子をご覧になった、2008年度の地域社会プログラム助成対象者である宮崎岩一さん(NPO法人八丈島産業育成会・理事長)が、八丈島に設置されている風力発電機を用いて作った電気をバッテリーに蓄電

これから、選考委員会による選考を経て、来年3月に開催される理事会で助成対象プロジェクトを決定します。助成金予定総額は、1億2000万円、内6000万円を東日本大震災対応の「特定課題」へ充当する予定です。
全国各地より多数のご応募ありがとうございました。



八丈島から八丈小島を臨む

し、それを動力として点灯できるLEDライトを、設置してくださいました。

八 丈島は風速10mを超える日が年間約150日(都心の約6倍)あり、風力発電に適した土地であることから、11年前に発電機が設置されました。島の特性のひとつである刻々と変わる風を全方向から受け、効率の良い発電ができるよう、発電機は三本羽根タイプではなく、垂直型のものでメインに使用しています。垂直型はプロペラ部分を縦に積み重ねることができ、横幅が約2mで設置に場所を取らないこ



垂直型の風力発電機



1台の発電機につき50個のバッテリーが設置されている

とや、回転音がほとんどしないのも特徴です。発電機のそばには制御室が設けられ、コンピュータによって発電量を確認したり、直

気を家庭用電流に変換してバッテリーに蓄電する設備が整えられています。今年の11月からは、風力発電のバッテリーのみで動く電気自動車のレンタカーが島内を走るようになり、観光客にも自然エネルギーを利用してもらう取り組みが始まりました。



LEDライトが灯るトヨタ財団受付

夕財団での試運転が始まりました。

受 付には、当初5ワットのLEDライトが3本設置されましたが、思いのほかの明るさと、電力消費量を鑑み、10月から2本のライトを点灯しています。受付スペースの木目に合った優しい色合いの明かりが灯り、お客様からもご好評をいただいています。(広報/新出洋子)

訃報

林雄二郎先生

トヨタ財団の初代専務理事として、当財団の礎を築かれた林雄二郎先生が11月29日95歳で逝去されました。

林先生は、初代理事長(後に会長)豊田英二氏の選任で1974年専務理事に就任されました。退任までの13年間、助成プログラム運営の専門家であるプログラムオフィサーという職務を確立されるなど、財団の組織づくりにご尽力いただきました。『日本の財団—その系譜と展望』(共著)の執筆など、日本における助成財団の理念構築にも大きな貢献をされています。

松方康 監事

当財団監事松方康氏(三井住友海上火災保険株式会社名誉顧問)が11月27日78歳で逝去されました。1994年に当財団監事に就任、当財団の運営にご尽力いただきました。

PRODUCTS

●助成プロジェクトの成果物

助成プロジェクトに関連した書籍を紹介します



詳解 ベトナム語辞典

- 編者：川本邦衛
- 発行：大修館書店
- 発行日：2011年8月30日
- 価格：28,000円 + 消費税

日 本人研究者がネイティブの方の協力を得ながら編集した、日本初の本格的なベトナム語—日本語辞典です。

日常語から政治・経済、宗教・民俗、文学作品、医療、科学分野の用語まで、およそ5万5000語が収録されています。中国語に由来する言葉には漢字表記があり、巻末には、漢字のベトナム語発音を記した「字音検索表」が掲載されているなど、漢字文化圏の日本人にわかりやすい構成となっています。

本辞典の刊行にあたり当財団では1981年と1992年に「東南アジア諸語辞書編集出版助成」(本助成プログラム)は、現在すでに終了しています)で助成を行いました。

新出 洋子 (トヨタ財団広報担当)



Photo by Iwakazu Miyazaki

飛行機で50分、コンビニもファーストフード店もない島、でも東京都。夜になれば辺りは真っ暗、満天の星空が美しい。……このところ、八丈島に魅せられて、よく行きます。自然資源(水、風、地熱)がとても豊か、もちろん緑も人の心も豊かで、穏やか。八丈島では、風向きによって風に別々の名前がついていることにもその豊かさは現れています。北西の風は「サガ」、北東は「ナレイ・ナライ」、南西は「ナガシ」、南東は「タツミ」と八丈方言で呼ぶのだそうです。上の写真を撮ってくださった宮崎さんが教えてくれました。丘の上に風車(風力発電機)が見えてきたとき、なぜか心も浮き浮きして、丘を駆け登りたいほどでした。垂直型のプロペラがまわっている様子は見飽きることがなく、強風に吹かれながら2時間もボーッと見ていました。これも確かに、人が自然と上手に共存する術なのかもしれない。大空を吹き渡るこの風の力が、未来を担うエネルギー源のひとつになるといいな、と思いながら

*関連した記事が36～37ページにあります。ご参照ください。



助成金贈呈式会場にて

【編集後記】
LAST WORD

● 2012年がもうそこまで来ているが、この2011年は人類史上に残るほど様々なことが起きた年。

その結果、われわれの周りの海には、涙があふれている。

そんな思いをもって新たな年を迎えねばならない。

志をもち、常に心豊かに、他人を思いやり、譲り合う気持ちをもち、決して傍観者や批判者にならずに、たとえ僅かであっても、未来への一筋の光を見出し、いかねばならないだろう。果てしない航路の水先案内人として……。[AN]

● インドネシアの活動地を訪ねてきました。

百聞は一見に如かず。今回の出張(20ページ参照)で経験した、森の香り、早朝の澄んだ空気、現地のおいしい食事、蚊に刺された腫れとかゆみなどを皆さんに十分伝えられないことに、なんともいえないもどかしさを感じます。通常の旅行では行かないような場所での、この仕事ならではの出会いにも、伝えきれない感動がありました。そのひとつが、記事では紹介できなかった、ムカール・バル村で幼稚園の運営に奮闘し

ているエヴァさんとの出会いです。

彼女はジャワ島の大学を卒業して地元に戻り、学生時代にバイトで貯めたお金で、一軒の空き家を幼稚園に改装しました。政府の支援がないので、彼女は無給で働いています。都会の大学を卒業しているのだから、いい就職やいい結婚相手を求めるのが普通ですが、彼女は逆の道を歩んでいます。「私は子どもが大好き。村の人にはなかなか理解してもらえないけど、幼児教育は重要だから、幼稚園をずっと運営したい」と語るのを聞いて、リリーさんが言っていた「考え方の転換を思い出しました。社会を変える力は、こうした「考え方の転換」から出てくるのではないのでしょうか。それがどのような変化をもたらすのか、近い将来、今回の訪問先をもう一度訪ねてみたいと思います。」[SK]

● 新緑の緑、紅葉の赤、雪の白。岩手の自然は、半年間で色々な顔を見せてくれました。被災地も草に覆われ、瓦礫が撤去された空間は、

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブ・サイトの「お問い合わせ」フォーム、あるいはファックスでご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.8

発行日 2011年12月22日
発行人 伊藤博士
編集人 野々宮彰彦

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <http://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 トヨタループス

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

「遠目でみれば」原っぱのように見えることもあります。同様に、仮設住宅に引越された方たちに対しても、家の中ならもう安心、と思われている部分があるように感じます。テレビの画面を通してではなく、その場に立って初めて見えることがたくさんあります。一人でも多くの人が被災地に立ち、何ができるか考えることが、復興へ向けた力になるのではないかと思います。[AW]

● 今年も残すところあとわずかとなりました。今年一年、当財団の活動についてご協力、ご支援くださった方々、『JOINT』読者の皆様、ありがとうございました。お陰様で、8号まで無事に発行することができました。

今後本誌の誌名通り、財団と読者、財団と社会等々の「継ぎ目」として、多様な視点による記事をご提供できればと思っております。

来る年が皆様にとって良き年になりますようにと強く願っています。[RK]



公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION

<http://www.toyotafound.or.jp/>

JOINT No.8